目次
世界化時代の中の真宗学 1
1997年度「一般研究」研究結果概要 2
1997年度「指定研究」研究経過報告 9
1998年度「一般研究」研究結果概要 16
1998年度「指定研究」研究経過報告 19
第12回国際仏教学会参加報告 26
第9回国際真宗学会参加報告 28
彙報 30

大谷大学真宗総合研究所
研究所報
No.38 2000. 12. 25.

世界化時代のなかの真宗学

1999年度国際仏教研究班チーフ　安冨信哉

グローバル化時代といわれる。研究室の片隅でそのことを実感するのは、海外の知人とEメールで交信をするときである。はるかな友と瞬時に情報を交わす。そんな奇蹟を、まるで因陀羅網のように、世界に張りめぐらせたインターネットを通して、私たちは行っている。この「電子」因陀羅網のネットのなかに、現代人は棲んでいる。

グローバル化時代の到来は、真宗・仏教の領域にとって、どういう意味があるだろうか。ふと想い出されるのは、1997年11月に来学された宋錫玉氏（Suk-kun Song・韓国・東国大学校総長）の示唆に満ちた講演での指摘である。宋氏は、「世界化」という人類文明史的に大変な転換期を迎えている現代、あらゆるものを根本的に再検討し、発想自体の転換を図らなければならなくなったといい、世界化の意味について、

> 人類の普遍的価値から離れてはどういうものであれ、存在意義を喪失するようになったということであります。

と述べられた。普遍的な価値とは、世界の人びとにとって有意味だということである。では、その普遍的な価値は、どのように明らかになるのであろうか。宋氏は、同時につぎのように言及された。

> しかしこの普遍性は常に特殊的契機を通した上で発揮し実現されます。

さらに氏は、その特殊的契機について、地方化と個性化であると、補足して述べている。ややもすると、世界化の潮流のなかで、平板化や画一化が進むのが現状であるが、地方性や個性を見失った世界化は、人類の文化を薄っぺらな痩せたものにしてしまう。宋氏の指摘は、その警告に立った予見であると理解される。

私が研究所で関わってきているのは、国際仏教研究班であるが、この研究班の主要プロジェクトのひとつに、近代真宗教学の翻訳・研究がある。目下、清沢満之、曽我量深、金子大榮、安田理深の諸論稿の英訳作業を、海外在住の嘱託研究員の協力を得て行っている。壮言すれば、この仕事は、真宗を世界化の過程のなかに把え直すと同時に、その個性を際だたせようとする試みである。この二つの契機を重視することによって、真宗の普遍的意義が見出されるであろう。これからの真宗学は、この二つの契機―世界性と個性―を同時に追求していかなければならない。

ところで2001年8月2日から4日まで、本学は、第10回国際真宗学会大会を、

「願に生きる　―真宗の実践的意味―」

のテーマのもと招致する運びになった。国際仏教研究班は、大会の開催に向けて、全面的にバック・アップすることになる。いよいよ世界化時代に突入していくいま、真宗の普遍的な意義を、海外からの多数の参加者と確かめ合う貴重な機会になることは疑いえない。

1997(平成９)年度「一般研究」研究結果概要

共同研究

パーリ語貝葉写本の文献的研究

研究代表者　吉元　信行
(仏教学)

大谷大学図書館には、南方上座仏教の貝葉写本が多数蔵されており、我々研究員が中心となって編集されたその目録『大谷大学図書館蔵・貝葉写本目録』(大谷大学図書館編、平成７年３月刊) が出版されてから３年が過ぎた。本学所蔵貝葉は、目録作成のための現地調査によって、東南アジア地域で書写されたものであるが、現地では散逸しかけている貴重な文献であることが判明した。先般、本学よりこの目録が内外の専門家や研究機関に寄贈されたが、さっそく多数の反響が寄せられており(早速外国で本目録の書評が二篇発表された＝この翻訳を年報で報告予定)、研究にこの貝葉写本を活用しようとする学外の研究者からの問い合わせが寄せられ始め、すでに学外者によってもこの貝葉写本を用いた研究がなされつつある。

そこで、我々は、本学におけるパーリ学を専門とするスタッフとして、昨年度「一般研究」により、いち早くその文献的研究に着手した結果、クメール・ビルマ・モン文字貝葉写本について、ほぼその大要を整理し得た。本年度もその継続研究が認められたので、昨年度の成果に基づいて、以下の研究作業を継続し、後述のようないくつかの成果を得ることができた。

１．本学パーリ語貝葉写本の出自及び将来経路の解明：この問題に関しては、すでに研究員長崎によって『貝葉写本目録』の解説において触れられているが、その未解決の部分をこの共同研究によって調査した。この研究の一環として、本研究プロジェクト一同は、平成９年12月25日、本学貝葉写本の将来に関係があると見られるタイ将来の仏舎利を納めた名古屋市の覚王山日泰寺を訪問し、そこにおける貝葉写本を中心にした調査を行った。ここではパーリ学が専門の愛知学院大学教授前田恵学博士の指導と覚王鷲見住職の説明を受けた。そして、覚王山には本学貝葉写本と酷似したパーリ七論の写本の一部が存在するものの、大谷大学にタイ王室より貝葉写本が将来されたのは、覚王山における仏舎利の将来とは同時ではないことが判明した。

２．貝葉目録における套毎の巻頭・巻末文のローマナイズ作業を貝葉写本原本と照合しつつ継続し、クメール・ビルマ・モン文字の貝葉についてはほぼ完成した。この成果は今後の研究に活用される。

３．全貝葉写本について、(1)PTSにもほぼ完璧な校訂本があって、本写本と対校の必要の少ないもの、(2)PTSの校訂が不完全で、本写本との対校によってその成果の期待されるもの、(3)PTS等にまだ校訂出版されていない新資料（稀覯写本)、(4)現地語など、パーリ語以外の言語で書かれていて、本学の現有スタッフでは研究の困難なもの、などの分類整理がほぼなされ、この成果を一覧表にした。この一覧表は『大谷大学図書館所蔵・貝葉写本目録』のサマリー的役割を果たすこととなり、目録は高価で、専門の研究者すべてが所持しているわけではないので、研究年報またはその抜刷を専門の研究者に広く配布して、本学貝葉写本の活用のための手引きになるようにしたい。このことによって、上記(4)のスタッフでは研究の不可能な資料についても、学外の研究者による研究の道が開けてくるであろう。

４．上記３．(1)(2)の写本群について、PTS版等の刊本との照合表を作成した。この照合表によって、刊本を読む場合、本学貝葉写本を容易に活用できるようになる。

５．上記２．(3)の稀覯資料の中で特に重要な資料の一部について校訂・解読研究を実施した。稀覯貝葉写本中、吉元が中心になって、タイ所伝の“Paññāsajātaka”のなかの“Surūpajātaka”校訂と解読研究を完成した。また、研究協力者大上清は、“Sisorajātaka”の校訂・解読研究をなし、その成果を修士論文として大谷大学に提出した。その成果の一部はインターネット上で公開されつつある。
(http://web.kyoto-inet.or.jp/people/ohgami/baiyo.html)。

６．公開講演会の開催：タイ所伝のジャータカ関係貝葉写本の研究で業績のある田辺和子博士（東方研究会研究員）を招聘し、「東南アジアに伝わる羽衣伝説―スダナとマノハーラ―」と題する公開講演会を実施し、あわせて博士より本共同研究について様々な知見を得た。この講演筆録を年報に掲載。

７．ビルマ文字註釈文献等の刊行及び稀覯写本のコピーの収集：池田嘱託研究員はミャンマーの寺院を調査し、標記資料を収集し、本学図書に収めた。また、未刊の複註文献について、そのコピーを将来し、整理製本し

た。

本研究は、研究代表者及び次のメンバーの共同研究によってなされた。研究員：長崎法潤（本学教授）、嘱託研究員：池田正隆（本学非常勤講師）、研究補助員：舟橋智哉（本学大学院博士課程）、研究協力者：奥村浩基（本学大学院博士課程）、柏原信行（龍谷大学講師）、大上清（前本学大学院修士課程）、金光朋充（前本学大学院修士課程）、ミャ・ミャ・チ（本学大学院修士課程）ほか。

この共同研究により、本学図書館所蔵パーリ語貝葉写本が、パーリ仏教学及び東南アジア仏教文化研究に果たす役割が明らかになり、散逸しかけている貝葉写本を解明するという点もあわせて、学界を益することになるであろう。

＊『紀要』16に研究成果発表済。

共同研究

三朝高僧伝の比較研究

研究代表者　滋賀　高義
（東洋仏教史）

平成八年度は禅宗五祖弘忍の後を承けた神秀と慧能、すなわち所謂北宗と南宗の関係に照準を合わせて、関連する釈教碑十一首の解読を終えた。研究の継続が認められた平成九年度の前半は、さらに釈教碑の解読作業を続け、慧空撰「大唐東都荷沢寺歿故第七祖建身塔銘并序」・徐岱撰「唐故招聖寺大徳慧堅禅師碑銘并序」・劉禹錫撰「袁州萍郷県楊岐山故広禅師碑」・賈餗撰「楊州華林寺大悲禅師碑銘并序」・裴休撰「唐故圭峯定慧禅師伝法碑銘并序」の五碑を解読した。荷沢寺第七祖とは慧能を嗣いだ神会をいい、その建身塔銘は近年に出土しておおいに話題となった新出の資料である。慧堅禅師・広禅師（乗広）ならびに大悲禅師（霊坦）は神会の弟子に数えられる。圭峯定慧禅師は教禅一致を説いた華厳五祖宗密をいう。

後半は研究代表者が平成九年度末をもって定年退職するという事情もあって、研究成果の報告書を作成すべく、研究会はその作業にとりかかった。かくして研究代表者滋賀高義を編者とし、「大谷大学真宗総合研究所　三朝高僧伝の比較研究班」を発行者として、Ｂ５版400頁の『唐代釈教文選訳注』を年度内に刊行するにいたったのである。その内容を報告書の目次をもって簡介すれば以下のごとし。

唐代釈教文選訳注

―釈教文と『宋高僧伝』―		滋賀　高義
唐代釈教文のテキストについて		竺沙　雅章
荊州玉泉寺大通禅師碑銘并序	張説撰	河内　昭円
大照禅師塔銘	李邕撰	今場　正美
大唐大安国寺故大徳浄覚禅師碑銘并序	王維撰	浦山あゆみ
唐少林寺霊運禅師塔銘	崔琪撰	西尾　賢隆
元識闍梨廬墓碑	張説撰	島津　京淳
大薦福寺大徳道光禅師塔銘	王維撰	若槻　俊秀
六祖能禅師塔銘并序	王維撰	若槻　俊秀
曹渓第六祖賜諡大鑑禅師碑	柳宗元撰	福井　敏
大唐曹渓第六祖大鑑禅師第二碑并序	劉禹錫撰	福井　敏
大唐東都荷沢寺歿故第七祖建身塔銘并序	慧空撰	島津　京淳
唐故招聖寺大徳慧堅禅師碑銘并序	徐岱撰	佐藤　義寛
袁州萍郷県楊岐山故広禅師碑	劉禹錫撰	佐藤　義寛
楊州華林寺大悲禅師碑銘并序	賈餗撰	松浦　典弘
唐故圭峯定慧禅師伝法碑銘并序	裴休撰	織田　顕祐
益州多宝寺道因法師碑文并序	李厳撰	大内　文雄

語釈索引

巻頭の滋賀高義「唐代釈教文選訳注序―釈教文と『宋高僧伝』―」は、本研究の総括である。釈教文と『宋高僧伝』を比較するなかで、『宋高僧伝』が有する問題点を指摘すると同時に、この書の伝記資料としての価値の高さを再認識している。たとえばこの僧伝の慧能伝のごときはもっとも信頼するに足る資料であると断ずるのである。次いで竺沙雅章「唐代釈教文のテキストについて」は、釈教文読解中に校勘の用に供した『文苑英華』・『唐文粋』・『全唐文』などの諸本について詳細な解説を施し、加えて校勘作業を通して得た各本の性格に関する新しい見解を示したものである。

以下は表記の各碑文について、解説・本文・校異・訓読・語釈を施し、巻末に語釈索引を付したものである。提示した碑文は冒頭に述べたように、所謂北宗と南宗の関係に照準を合わせている。いずれも初期禅宗史上に重要な意味を持つ基本資料である。ただひとり李厳撰「益州多宝寺道因法師碑文并序」のみがその範疇を超える。同碑は原碑が現存し、書者が欧陽通であるという点で書法のうえでもよく知られた初唐期の貴重な資料であるが、全文にわたって注解を加えた研究の跡は今までにない。

いまこれらの諸碑を解読し得たことは、斯界に裨益するところあるものと信じる。　（河内昭円記）

＊『紀要』16に研究成果発表済。

共同研究

清沢満之全集編纂のための基礎資料の調査研究

研究代表者　小野　蓮明
（真宗学）

これまでの清沢研究の基本資料であった暁烏敏・西村見暁編『清沢満之全集』（法蔵館刊）が絶版となっている今日、研究に耐えうる全集の刊行に対しては、内外からの強い要請がある。しかしながら、これまでに、同全集に未収録の清沢の論文などが発見されていることや、清沢満之の直筆原本との対校が不可欠であることなどを考えると、既刊の全集の整理・再編というだけでは不充分であることは明らかである。この見地に立って、本研究は清沢満之全集の編纂に向けて、直筆原本の所在確認と未収録資料の調査・整理を行うことと目的として進めてきた。

本年度は、これまでの事前の調査に基づいてフィールド・ワークを中心に活動を行った。その際の主な作業は、以下の２点である。

(1)西方寺（清沢の自坊）蔵書目録づくり

(2)未収録論文の収集。

(1)については、清沢の自坊である西方寺（愛知県碧南市大浜）を数度にわたって訪ね、清沢の蔵書を整理していくことを目標に、その整理にあたった。同寺には、寺の蔵書としておよそ千八百冊以上にのぼる和書と、数百冊の洋書が保管されている。本年度は、同寺の協力を得て、その目録づくりに着手した。そのうち、和書については（千八百二十二冊）全ての整理・目録化を終え、現在、引き続き洋書の整理に入っている段階である。

和書の整理方針として、書名・発行年月日はもちろん、蔵書印の有無、さらには書き込みの有無についても調査し、その上で蔵書目録を作成した。殊に明治36年６月（満之没年）以前のものを見ていくと、「徳永」「徳永満之」「清沢満之」「清沢蔵書」など、数種類の蔵書印が押されているものが発見され、中には書き込みや、はがき等も散見された。千八百以上にのぼる同寺の蔵書全てが、清沢の蔵書とは言い難い。完成する同寺目録から、清沢没年以降に発行されたものを除き、清沢の蔵書とは無関係に、もともと同寺に所蔵されていたと考えられるものを除いてけば、今後、清沢の蔵書が明らかにされるものと考えられる。これは、今後の清沢研究に大きな影響を与えることになるものと期待される。

(2)については、以前から指摘されている全集未収録資料の収集に努めてきた。碧南市を中心に満之に関する資料が残されており、地道に聞き取り調査をしながら、所在の確認をし、その収録も進めている。

＊『紀要』17に研究成果発表済。

共同研究

初期無量寿経の典籍・思想研究

研究代表者　加来　雄之
（真宗学）

現存する七種の漢訳〈無量寿経〉は、〈初期無量寿経〉と〈後期無量寿経〉に分けることができる。本研究は、この〈初期無量寿経〉に属し、二十四願経と呼称される『無量清浄平等覚経』と『大阿弥陀経（諸仏阿弥陀三耶三仏薩樓仏檀過度人道経）』の２経の典籍解読ならびに思想史的研究にある。

この２経の文献学的研究については、従来より多大な研究成果が報告されている。この研究の目的は、それらの研究をもとに２経の詳細な解読と思想研究、それにもとづいた基礎解読テキストの作成、ならびに２経が浄土教の歴史おいていかなる意味をもったかを明らかにすることにある。

本年度は初年度ということもあり、初期無量寿経のテキスト・データベースの構築に力を注いだ。とくに『大正新脩大蔵経』におさめられたものと、その底本とされている『高麗大蔵経』におさめられているものについて、諸本と校訂し、デジタル・テキストによるデータベースを作成した。また初期無量寿経についてこれまでに発表された研究成果を収集し検討した。

また隔週に一回のペースで、『大阿弥陀経』の基礎解読テキストを作成するための研究会をもった。加来が、

高麗大蔵経を底本としたデータに従って、書き下し、現代語訳、註の下案を作り、それを検討していくという形で行い、ほぼ上巻までを終えた。古田研究員による訓読によって、これまで『聖教全書』や『大正新脩大蔵経』の訓みがもつ問題点が明瞭になってきた。

共同研究

「R. H. Blyth研究」中間報告

研究代表者　多田　　稔
(英文学)

レジナルド・ホレス・ブライス博士は第2次大戦後、学習院高等部の外国人教師を本職として、その他、東京大学をはじめ多くの東京地区の大学で教鞭を揮い、学習院関係者をはじめ日本の多くの知識人たちに様々な影響を与えた人である。就中、禅の外国人理解者、あるいは帰依者として多くの著述をはじめ禅書の英訳を行った人であったが、その生前には人々にあまり知られた人物ではなかった。

私たちが今回ブライス研究に着手し、幾つかの事実を明らかにしようと思ったのは次の理由からである。その第一点は、ブライスという名前が殆ど現代の人々の記憶から消えかけていると認識されること、そのため戦後すでに50年を経ているのでブライスの「黒子」のヴェールをあげてその素顔を紹介してもよいのではないかと判断したからである。私たちがこの研究に着手した時点での、ブライス没後に彼を紹介した主な論文や著書の数は極めて少なかった。宗片邦義、*R・H・Blyth Bibliography with Quotations*（静岡大教養部研究報告、1972）平川祐弘、『「人間宣言」の内と外―ブライス教授と山梨提督をめぐって―』（新潮社、1983）そして没後20年に当ってそれまでに世に出されていた記事に加えてブライスの謦咳に接していた、主として学習院の関係者による『回想のブライス』（回想のブライス刊行会、1984）など10点足らずのものであった。しかしながら、ブライス研究にとって画期的な集大成は1996刊行の吉村侑久代『R・H・ブライスの生涯　禅と俳句を愛して』（同朋社出版、1996, 6, 22）であろう。この著作によってブライスの生涯についてこれまで断片的にしかわかっていなかったことがほぼ埋められたと言える。

今回の研究は、松ヶ岡文庫の大拙及びブライス関連の書物と書簡に関する多田とワデルによる調査に次いで、コロンビア大学関連の知己の一人、バートン・ワトソン氏との面接調査、及び大磯在住のブライスの次女、武田ナナさんとの面談も行われた。幸運なことに多田の旧友の大磯在住の国谷医師は、昔からブライス家のホーム・ドクターであったので話は早かった。更に、ワデルによるブライスの門弟第一号ともいうべきハワイ在住のロバート・エイトケンを訪ねてのワデルによる聞きとり、同じく友人の一人であったオーティス・ケリーらとの再会も行われたことであった。

しかしながら今回の調査研究のハイライトはブライスによって遺贈されたワデル研究室に集められている書簡、その他のブライスの書いたものに光を当てたことであろう。こうした資料にもとづいて*Annotated Bibliography of Writings:* Books, Essays, Uncollected Writings, Book Reviews, Translations, Letters, Miscellaneous Writings with Annotations Containing information about their content and circumstances of publication 及び前述のローバート・エイトケン、バートン・ワトソン、オーティス・ケリーその他学習院関係の方々との面談等に基づいた*Annotated Chronology of Life of R·H·Blyth*が刊行され、ブライス研究が更に一歩前進するものとわれわれは確信している。

＊『紀要』16に研究成果発表済。

個人研究

シロイヌナズナの突然変異体の分離

研究代表者　加藤　尚子
(科学)

双子葉植物のシロイロナズナと、単子葉植物のイネはそれぞれ多くの遺伝学的、生理学的な研究が進んでおり、現代の植物研究において、モデル植物としての役割を果たしている。シロイヌナズナは世代時間が1～2月と短く、実験室内で容易に栽培することができるなど、モデル植物としての条件を備えている。又すでに多くの突然変異体が分離されていて、研究者に無料配布される機構

も世界的に整備されている。本研究はそれらを有効に利用して、シロイヌナズナの花の形態形成において細胞間でどのような相互作用があるかを知ることを目的にしている。

植物のホメオティック突然変異体は古くから知られ、園芸植物として利用されている。例えば、バラやサクラの八重の花は本来雄ずい（雄しべ）や雌ずい（雌しべ）となるべき器官が花弁（花びら）へと変わったもので、このような突然変異体をホメオティック突然変異体という。シロイヌナズナには多くのホメオティック突然変異体が存在し、それらを用いた遺伝学的な解析からABCモデルという花の形態形成の基本的概念が提案されている。

シロイヌナズナの花には4つの器官があり、外側から（がく、花弁、雄ずい、雌ずい）の順に同心円状に配置している。この同心円状の位置をwhorlと呼ぶ。即ち一番外側からwhorl 1には4枚のがくが、whorl 2には4枚の花弁が、whorl 3には6本の雄ずいが、whorl 4には2枚の融合した雌ずいが生じる。ところがクラスA遺伝子の突然変異体はがくの代わりに雌ずいが、花弁の代わりに雄ずいが生じ、（雌ずい、雄ずい、雄ずい、雌ずい）という形態の花になる。クラスB遺伝子の突然変異体は、（がく、がく、雌ずい、雌ずい）となり、クラスC遺伝子の突然変異体では、（がく、花弁、花弁、がく）という構造の花となる。そして、ABCすべての遺伝子の機能が失われた三重突然変異体では、各器官が葉状の器官に置き代わった花ができる。このことは、花の各器官は普通葉と同じものが変化してできたものであるという、ゲーテが彼の観察に基づいて出した結論を裏づけている。

これらの観察と遺伝学的な解析によって花の形態形成におけるABCモデルが提唱された。即ち、一番外側のwhorl 1ではクラスA遺伝子が働いてがくが、whorl 2ではクラスA遺伝子とクラスB遺伝子が働いて花弁が、whorl 3ではクラスB遺伝子とクラスC遺伝子が働いて雄ずいが、whorl 4ではクラスC遺伝子が働いて雌ずいが形成されるというものである。このモデルによってクラスA遺伝子の突然変異体を説明すると、クラスA遺伝子が働かないのでwhorl 1と2ではがくと花弁ができず、その代わりに雌ずいと雄ずいができ、（雌ずい、雄ずい、雄ずい、雌ずい）となったものと理解できる。クラスB遺伝子の突然変異体では、whorl 2の花弁と雄ずいができず、そのかわりにがくと雌ずいができ（がく、がく、雌ずい、雌ずい）となる。クラスC遺伝子の突然変異体では、whorl 3、4の雄ずいと雌ずいができず、その代わりに（がく、花弁、花弁、がく）となる。

このように花の形態形成は4つのwhorlのどこにどのような器官を作るかという二つのことを決めなければならない。即ち、位置を決める遺伝子と器官決定遺伝子が働いている。そしてクラスA、B、Cの各遺伝子の間には遺伝子どうしの抑制や、活性化があることを示している。このことはすでに遺伝子が単離されて実験的に示されている。本研究ではこれらの事実を元にして細胞間のコミュニケーションを調べようとするものである。クラスA、B、Cの各遺伝子の突然変異体を使ってこれらのキメラ植物（2種の細胞を持つ植物体）を作ることによりできる花の構造がどのようになるかを検討したいと思っている。

そのためにまずキメラ植物を作る試みをしているところである。これまでのところ接ぎ木をして、次に接ぎ木をした箇所で切断すると新たに茎頂ができ、そこから伸びた枝からでた葉や花がキメラになることが報告されている。しかし、シロイヌナズナは小さな植物でこの操作がかなり難しいのでカルス培養した2種の細胞どうしでキメラを作る試みをしている。この試みはほとんどの植物でもなされていないので、その方法の確立からしなければならない状況である。もしこの方法でキメラができると簡単であることから園芸植物への応用などが考えられる。

まず継代培養を確立し、次に2種の細胞を混ぜ合わせてキメラを作るための条件を決めている。今は外観でキメラになっていることがすぐにわかるように野生株と、アルビノ突然変異体の2種を使って継代培養の条件や、キメラを作る条件の検討を行っているが将来的には、花の突然変異体を使って行うつもりである。それには2種の細胞を区別するために片一方にGUS遺伝子を入れてその遺伝子の発現を目印にしようと考えている。

＊『紀要』16に研究成果発表済。

個人研究

『親鸞聖人御絵伝』絵解き基礎資料の研究

研究代表者　沙加戸　弘
（国文学）

親鸞の三十三回忌を期して覚如宗昭が著した『善信上

人絵』は、数次の改訂を経て『本願寺聖人　親鸞伝絵』となった。

当初の形態は巻子本絵詞であったが、親鸞の遺徳を偲ぶ法会—報恩講—に集う門徒からの要請であろう、絵と伝文が別行されるようになる。

絵と伝文が別行されるようになった結果、絵の内容が不分明となり、絵に注記—札銘—が付された。拝読される『御伝鈔』を聴聞しながら、懸幅となった『御絵伝』を拝見する、というかたちが、近世初期における門徒の宗祖伝享受の典型であった。

しかしながら、『御伝鈔』の文章は極めて流麗ではあるが漢文の素養のない者には難解であることこの上ない。札銘の果す役割には当初から限界があったと考えるべきである。

そのような経緯から、近世中期「絵説」—エセツ・絵相を説明する営為—が興る。さらにその「絵説」は、進んで絵相の一つ一つに意味を付与し、教義として読みとってゆく営為—「絵解」(エトキ)—へと展開してゆく。

「絵解」の隆盛期は、幕末から明治初年であるが、本研究はこの「絵解」という営為の草創から衰退までを、資料によって跡付けることを目的としたものである。

結果、多くの資料の中から、『図解　親鸞聖人御一代記』(享保四年三月、北村四郎兵衛刊、八巻八冊、漢片半丁十一行、総丁数百三十九)、『御絵伝教授鈔』(安永二年正月、安永四年正月、菊屋喜兵衛他刊、前後編十巻十冊、漢片半丁十行、総丁数百六十五)、『見真大師　御絵伝詳指録』(明治二十年三月、西村九郎右衛門刊、五巻一冊、漢片半丁十行、総丁数二百十三)、『御伝鈔法話』(明治二十四年四月、西村九郎右衛門刊、三巻三冊、漢片半丁十行、総丁数百二十三)の四部を、期を画する資料として選定することができた。

「絵解」という営為を生み出し、確立し、真宗の法座における教化の大きな部門として位置付け、やがてその営為から徐々に退いていった勧化僧の意識の流れを、この四部の資料によって概観することができると考える。

＊『紀要』16に研究成果発表済。

個人研究

「メディア教育」の基礎的研究

研究代表者　藤田　昭彦
(心理学)

本研究の背景

「メディア教育」は、教育のメディアの吟味と併せて、メディア・リテラシーともいうべき能力の育成を目指すものであるべきである。しかし、技術的な可能性が優先されて開発製造されてきた新メディアゆえに、それらの基礎的研究が不十分であると考えられる。

人の認識・理解についての心理学的知見を整理しながら、感覚様式に適した情報やそれぞれのメディアが、人間の学習にとってどのような特性をもつかを明らかにし、メディア活用の基礎を明確にすることが、「視聴覚教育」にとってかわる「メディア教育」創造の第一の段階である。

今次の研究ではこの第一段階として、教育における新しいメディアの実用的特性を明らかにすることを目的とした。すなわち、新メディアの中心に位置するパーソナル・コンピュータが大学教育においてどのように利用されうるかを、具体的な授業科目(短期大学部幼児教育科教職科目「視聴覚教育」)で試行的に実践しながら確かめることにした。

「視聴覚教育」の試行的実践

大谷大学情報処理教室3においてはすでに、1995年、機械更新の際(DOS機からMacintoshに置換)に、教室内に簡易なネットワーク(AppleTalkとTimbuktuを使用)が構築され、すべてのパーソナル・コンピュータが相互接続されていた。そこでは他機の画面参照、制御およびファイル転送が可能であった。

しかしこの間、文教行政における情報基盤整備の推進にともない、各大学、研究機関の構内ないし域内ネットワークの構築が急速に進展し、本学においても段階的にいわゆるLAN構築がなされるようになり、情報処理教室や各研究室からも広域ネットワークに接続することが可能になってきたのである。

このような状況の変化を受けて、教室外のパーソナ

ル・コンピュータに参照用のデータベースを準備し、それらを授業時に教室から個別に利用できる体制を整えることにした。これらのファイル参照及び転送のためには、ブラウザーとFTPを使用するものとした。

これらが教室内コンピュータからブラウザーによって簡単に参照できるように、個人研究室内Websiteとして、ホームページを作成した。

実践結果についての評価

個人研究室にこのような極小のserverを設置することは、今後の教育展開を考えると有効な方法であると考えられる。自室で授業資料を作成し、そのままデータベースに保存すれば、教室から参照することができるわけである。個人が常に管理することができるので良質のメンテナンスが期待できるのである。

さらにこれらのデータベースを共用できるように設定すれば、良質な大学教育にふさわしい知的資料の集積とその利用が可能となるであろう。

今次の研究で準備したデータ群は、先に述べた学生作成の資料のほかに、私の担当する授業のシラバス及びテクスト資料、幼稚園の活動の一例として、「大谷幼稚園ホームページ」を準備した。

マルチメディアが広くいわれる現在、教育においてビデオ資料の活用は有効なものである。しかしネットワーク上で実際にそれらを活用するためには、さらに高性能なシステム整備が不可欠であることを実感させられる。現状ですべてのデータをデジタル化して利用することにはなお問題が残るところである。

＊『紀要』16に研究成果発表済。

1997(平成9)年度「指定研究」研究経過報告

特定研究

大学史編纂研究
—近代における大谷大学の成立と展開の研究—

研究員・チーフ　武田　武麿
(宗教学)

本研究は、大谷大学史編纂を目的として各年度ごとに中心課題をもって調査、研究を行い、大学史の完成を目指している。また大学史編纂の基礎となる学内外の関連資料の収集、整理にも力を入れ取り組んでいる。

前年度に図録写真集「大谷大学近代100年のあゆみ」を計画、検討してきたが、本年度はその完成に向けた作業に力点を置いて研究を行った。

まず会議および研究会を下記のように行った。

1997年

第1回4月4日(金) 18：00～　於大学史編纂研究室
　前回までの経過報告
　本年度研究計画の打ち合わせ
　図録写真集の掲載資料の検討

第2回4月15日(火) 18：00～　於大学史編纂研究室
　図録写真集の掲載資料の検討

第3回4月17日(木) 18：00～　於大学史編纂研究室
　図録写真集のデザイン検討および掲載資料の検討

第4回4月18日(月) 18：00～　於大学史編纂研究室
　図録写真集の資料の蒐集および整理体制の検討

第5回4月21日(月) 18：00～　於大学史編纂研究室
　図録写真集のデザイン検討および掲載資料の検討

第6回4月28日(月) 18：00～　於大学史編纂研究室
　図録写真集のデザインの検討

第7回5月1日(木) 18：00～　於大学史編纂研究室
　図録写真集の掲載資料の検討

第8回5月2日(金) 13：00～　於大学史編纂研究室
　図録写真集の掲載資料の検討

第9回5月8日(水) 16：00～　於大学史編纂研究室
　図録写真集の掲載資料の検討

第10回5月10日(土) 13：00～　於大学史編纂研究室
　図録写真集の掲載資料の検討

第11回5月12日(月) 18：30～　於大学史編纂研究室
　図録写真集の掲載資料の検討
　図録写真集のコラム欄の検討

第12回5月19日(月) 18：00～　於大学史編纂研究室
　図録写真集の掲載資料の検討

第13回5月22日(木) 18：00～　於大学史編纂研究室
　図録写真集の掲載資料の検討

第14回5月23日(金) 13：00～　於大学史編纂研究室
　図録写真集の資料整理

第15回5月26日(月) 18：00～　於大学史編纂研究室
　図録写真集の掲載資料の検討

第16回6日2日(月) 18：00～　於大学史編纂研究室
　図録写真集の掲載資料の検討

第17回6月4日(水) 18：00～　於大学史編纂研究室
　図録写真集の掲載資料の検討

第18回6月12日(木) 18：30～　於大学史編纂研究室
　図録写真集の付録およびコラム欄の検討

第19回6月23日(月) 18：00～　於大学史編纂研究室
　図録写真集の掲載資料の検討
　図録写真集の校正の検討

第20回6月25日(水) 18：00～　於大学史編纂研究室
　図録写真集の掲載資料の検討

第21回6月26日(木) 18：30～　於大学史編纂研究室
　図録写真集の掲載資料の検討

第22回6月30日(月) 18：00～　於大学史編纂研究室
　図録写真集の出版計画の報告
　図録写真集のデザインの検討
　図録写真集の校正の検討

第23回7月3日(木) 19：00～　於大学史編纂研究室
　図録写真集の校正の検討

第24回7月7日(月) 18：00～　於大学史編纂研究室
　図録写真集の写真キャプション原稿案の検討
　図録写真集のコラム欄の検討

第25回7月10日(木) 18：00～　於大学史編纂研究室
　図録写真集の写真キャプション原稿案の検討

第26回7月14日(月) 18：00～　於大学史編纂研究室
　図録写真集の写真キャプション原稿の検討・確定

第27回7月15日(火) 18：00～　於大学史編纂研究室
　図録写真集の出版工程の報告
　図録写真集の掲載資料の二次検討（学寮創設～）

第28回7月17日(木) 18：00～　於大学史編纂研究室
　図録写真集の写真キャプション原稿の検討・確定

第29回7月23日(水) 13：00～　於大学史編纂研究室
　図録写真集のキャプション決定原稿の整理

第30回7月24日(木) 18：00～　於大学史編纂究室

図録写真集の色校正の検討
第31回 7月31日(木) 18：00～ 於大学史編纂研究室
図録写真集の色校正の検討
第32回12月1日(月) 18：00～ 於いそべ
図録写真集完成報告会
第32回 8月6日(月) 18：00～ 於大学史編纂研究室
図録写真集の校正の検討
1998年
第33回 2月7日(土) 16：00～ 於大学史編纂研究室
蓮如上人御遠忌に本山での大学史コーナーのパネル展示の検討

次いで学外学会では10月13日(月)～15日(水)に東北大学および東北学院大学を会場として開催された全国大学史資料協議会に参加し、各大学における大学史編纂の実状および問題点が検討され、参加が有意義なものとなった。また資料収集では、学外の資料調査を適宜行ったが、学内資料として図書館に蔵されている大部な学事関係資料を調査し、必要に応じて大学史編纂研究室へ移管、整理するとともにデータベース化を試みた。ただし大部なため次年度以降への継続作業となった。

以上、1997年度は前年度より継続された図録写真集の完成が主な仕事となった。一方で、図書館より移管した資料群の整理、データベース化も重要な仕事であり、今後の大学史編纂の基礎となる重要な資料として活かされるていくものと考える。

特定研究

国際仏教研究班
—諸外国における仏教研究の動向と展開の研究—

研究員・チーフ 安冨 信哉
(真宗学)

本研究は、諸外国における仏教研究の動向を把握することと、本学の仏教研究の成果を国際社会に発信することを目的とする。

国際化された現代社会において、仏教、とくに親鸞の思想への関心が高まってきている。このような状況の中で、仏教・親鸞の精神を設立理念とする本学が果たす役割はますます重要性を増している。最近の仏教研究は、欧米社会とくにアメリカにおいて、方法論を含めて多様化しており、これら海外における仏教研究の動向を把握し共有することは本学の仏教研究にとっても必要不可欠である。また国際社会に本学の仏教研究の成果を発信し紹介することは本学の重要な責務であろう。

本年度は、近代における仏教、ことに親鸞の思想研究を英訳し発表していくことに着手する一方、これまで行ってきた調査研究・対話交流・研究員の海外派遣・資料収集などを継続して行う。

研究計画二年目となる本年度は、昨年度に検討された研究計画にもとづいて、近代教学者の重要な論考のアンソロジーの作製に着手した。

清沢満之「我が信念」
曽我量深「地上の救主」
安田理深「名は単に名にあらず」

具体的には、それぞれの翻訳担当者の作成した原稿を、翻訳検討会において徹底的に検討するというかたちをとった。毎回2時間から3時間をかけておこない。曽我量深の翻訳「地上の救主」については年度末に集中的な検討会をもった。

また1997年6月にドイツマールブルク大学より第3回ルードルフ・オットー シンポジウムの共同開催の要請をうけた大谷大学は、11月に共同開催を正式に受諾した。そのことをうけて、その実現に向けての準備を真宗総合研究所が中心となってすすめられることになり、国際仏教研究班も全面的に協力した。その一環として、本学の客員研究員でもあり真宗についてのドイツ語の著作があるVolker Zotz氏よりドイツ語による真宗の概説書の作成に向けて講演をもらい、熱心な議論が交わされた。本学にとってはヨーロッパにおいて開催するはじめての国際学会でもあり、またドイツというキリスト教プロテスタントの本場で行われるため、十分な準備と態勢が整えられる必要があった。

発信の一環として、宮下晴輝研究員がハンガリー、ブタペストで開催されたThe 35th International Congress of Asian and North African Studiesに7月7日から12日まで参加し発表した。(研究発表は本研究所『紀要』12号に掲載される) また加来雄之研究員、樋口章信研究員がカナダ、カルガリーにおいて開催されたThe 9th aniversary of the International Association of Shin Buddhist Studies (第9回国際真宗学会大会) に参加し発表を行った。ロバート・F・ローズ研究員がアメリカ合衆国サンフランシスコにおけるThe American Academy of Religionsに11月22日より25日まで参加した。

特定研究

蓮如研究
—現代における真宗の再興—

研究員・チーフ　鍵主　良敬
(仏教学)

1998（平成10）年４月に蓮如上人の500回忌を迎えるにあたり、大谷大学においても協賛事業として次の３つのプロジェクトを昨年度より立ち上げた。第１には「蓮如」に関する論文集の刊行、第２に『御一代聞書』に対する現代的視点からの解説書の作成、そして第３に定本「七祖聖教」の編集である。

第１の論文集は現代的課題を視野に入れながら、幅広い視点から蓮如の思想を明らかにすることに目的を置き、大谷大学独自の論集を作成することを目指した。そのため執筆者は真宗学・仏教学にとどまらず、他学科および学外にまで広く依頼した。詳細については、1998年４月に刊行された『蓮如の世界』そのものを見ていただきたいが、「現代と蓮如」、「蓮如の教学」、「蓮如の教化」、「仏教史から見た蓮如」、「蓮如の伝承・文化」、「蓮如に学ぶ」というテーマのもと、総勢40名の方から論文を寄せていただいた。

第２の『御一代聞書』の解説書については、蓮如上人の人間像が浮かび上がってくることを心がけるとともに、人々の中にどのように教えが伝わっていたのかという面も明らかにすることを目指した。そのため、『御一代聞書』の全条について、逐一解説を加えていくという形ではなく、テーマを立てて、その視点から蓮如の仕事を見ていくことにした。具体的には大きく「蓮如の教え」「蓮如という人」「蓮如をめぐる人びと」という章に分け、テーマに対応する条文を抄出していくという形をとっている。また、資料篇として、『御一代聞書』の本文に註を加えて収録するための作業をあわせて進めている。刊行は次年度になる予定である。

第３の「七祖聖教」の編集は、大谷派において定本として依用すべき「七祖聖教」の編纂を目指すものである。これについては、南条神興本を底本としながら、必要な校訂を施す作業を行っている。ただし、この事業は作業としても多難であるだけでなく、底本そのものから検討し直す必要がある。そのため、このたびの500回忌を記念として始める事業ではあるが、性急に事を運ぶのではなく、さらに宗祖750回忌も展望するものである。

委託研究

真宗史料研究
—『園林文庫』目録データベース作成のための調査研究—

研究員・チーフ　大桑　　斉
(国史学)

本研究は「真宗史料研究」の名のもとに1991年度にスタートし、当初課題として「東本願寺近世近代史料の研究と翻刻並びに出版」を掲げていた。それは、東本願寺より『園林文庫』史料群の調査・整理と目録作成の業務が大谷大学に委託されたことを享けたものであり、遅れている東本願寺関係近世近代史料の整理を進めることにより、当該史料の公開・公刊のための基盤整備を行おうとするものであった。

以来、中心課題である『園林文庫』史料群の調査を中心に、調査内容のカード化による整理作業、および調査カードに基づく史料目録データベースの作成を累年にわたって推進してきて７年目となった。はじめには、数年以内に作業終了が見込まれるであろうとの予見があったが、ダンボール箱にして182箱、昭和28年緊急調査時作成の旧目録で5312点の史料群は、実は「一括」「一袋」で１点とされた史料が多かったことによって、整理に思わぬ時日を要することになってしまっている。

というのは、単に史料点数が予想を越えているという問題ではない。本研究班の目指す史料の調査・整理は、旧目録の整理番号にしたがって進めてはいるものの、その史料表題についてはすべてについて新たに見直すことを行っており、各史料の内容までを的確に表現する表題を付すよう努力している。そのためには調査カードへの調査内容の記入作業が目的に沿って確実になされることが必須であり、たとえば書状１通にしても、誰が誰に何を伝えるために書き送ったかを、その差し出し日時とともに記録してこそできることである。それは、とりもなおさずその史料を解読することであり、いわゆるくずし字を読むことにほかならない。実際の史料の１点ずつを読むことからはじめて、書いた人物と宛先の人物との関係を考え、何のために書かれたものであるかを特定して

表題を考えねばならない作業である。古文書解読能力というのはくずし字が読めればよいというものではない。近世近代の東本願寺をめぐる人物群の諸関係を学ぶことや、諸々のできごとについて理解することの素養が必要であって、そのためには何よりも熟練した作業者の育成が継続的に行われることも欠けてはならないのである。

上記の基本的困難を常に抱えながらも、本年度は作業進行率15%（旧目録数基準）を目標に作業を続けてきた。その結果は、史料収納ダンボール箱数を基準としては12.64%，旧目録を基準とした達成率では12.03%、であり、目標を下回ったことが残念である。昨96年度の達成率である箱数にして6.04%、旧目録数にして7.44%に比べれば大きく達成率が伸びたことであるが、過去に最高の達成率を示した94年度の箱数基準12.64%、旧目録基準17.21%には及んでいない。ちなみに、本年度の調査箱数は23、調査史料数は点数では5412、調査カード作成数にして28582であった。

かくて、91年度発足からの『園林文庫』史料整理作業の達成率累計は、127箱の調査を終えて箱数で69.78%、旧目録数基準で86.62%に達することができた。本年度における達成率回復に満足することなく、一日も早い全作業終了を期するところである。

作業達成がともすれば遅滞することの要因は、主として調査作業を担当する人材の確保の難しさにあるといえる。熟練を要することは上述したが、あえて繰り返せば、要は古文書を読み解いて調査データに置き換えることのできる人材がいること、およびそのノウハウを次の人材要請のために伝えていける体制が常にとられているか否かということにかかっているといえよう。その意味で、本年度は熟達した何人かの大学院生がアルバイトとして作業推進に寄与してくれたことが大きかった。しかしながら、彼らが就職によって本研究班を離れる来年度のための後進育成については、育成の成果はあがっているものの、彼らの作業量を補うことのできるレベルに至るには今少しの期間を必要とするであろう。学生アルバイトに作業を委ねることで、史料調査経験の豊かな人材を育成して社会に送り出すことも兼ねるという副次的目的はこれまでも十分に達してきたが、やむを得ないことながら、その反面で作業推進が思うに任せなかったことを認めなければならない。

本研究班の最終目標は、『園林文庫』史料群の調査および整理をすませて史料目録データベースを作成することにある。したがって、近年中の作業終了を視野に入れて昨年度からデータベース作成のありかたについての研究も並行して進めてきた。最終的には4万点近いデータを一括処理する作業が必要となるため、これまでデータ蓄積に使用してきたパソコン機種では処理能力に無理があると判断し、本年度末に約10倍の処理速度を持つ新機種に移行することを決定した。同時にハードディスクの容量が限界であるところからこれも増設を図り、使用ソフトの『桐 Ver. 5』は Ver. 7 への無償アップを見込んで Ver. 6 に当面移行することにした。これらによってデータベース作成のための基盤はできたものと判断している。

なお、当該史料の公開については全ての作業が終了したのちに東本願寺が判断するという約束であるので、それまではデータの流出が決してないよう十分に注意を払っている。そのため、作業用パソコン機は大谷大学の設置しているコンピュータネットワークにはあえて接続していない。不便であることもないではないが、データを守ることを何より優先している。

委託研究

西蔵文献研究
—大谷大学所蔵の北京版大蔵経および蔵外文献の研究—

研究員・チーフ　片野　道雄
(仏教学)

本研究は、大谷大学図書館が所蔵するチベット語文献を整理・研究すると共に、貴重な文献を内外に紹介することを目的にしたものである。1997年度は、北京版西蔵大蔵経の丹殊爾勘同目録の第八分冊の発行と第九分冊(最終冊)の校正を行い、パーソナルコンピュータ・マッキントッシュ用のチベット語システムの改良とそれを利用した西蔵文献目録の電子版の作成を行った。

丹殊爾勘同目録に関しては、遅れていたⅡ－2(諸経疏部・唯識部・阿毘達磨部を合わせたもの)がようやく完成した。国内の関係機関(大学図書館など)に発送し、海外の機関へも発送することにしている。引き続いて丹殊爾勘同目録の最終冊であるⅡ－3(律疏部・本生部・書翰部・因明部・声明部・医方明部・雑部)の校正作業に入り、1997年度内の校了を目指したが、前冊との整合をはかるべきことなど幾つかの問題が見つかり、完成は次年度へまわさざるを得なくなった。

三年前より開発を進めてきたパーソナルコンピュータ・マッキントッシュ用のチベット語システムTibetan Language Kit for Macintosh(TLK)は既に内外のチベット研究者等に無料で配付され、使いやすいと好評を博している。しかし、本年、マッキントッシュのOSとその機能拡張ソフトがヴァージョンアップされたため、既開発のTLKは新しいOSには対応しないことになった。利用者からそのことの問い合わせもあり、早急に、新しいOSに対応するよう当該チベット語システムをヴァージョンアップする必要が出てきた。そのため、本研究班ではヴァージョンアップの方針を次のように決定して、作業を進めることとした。

(i)TLK本体
- 現ヴァージョンの三つのキーボードを再検討し、必要ならば改善する。
- フォント(特に結合文字、母音表示)を修正し、新たにKokonorフォントを追加する。
- マニュアルは基本的には旧マニュアルに従うが、システム環境を変更し、インストール方法をインストーラを使用する形に変更する。
- TLKと対応するソフトとそれに関する情報を収集する。

(ii)インストーラ
- 今回のヴァージョンアップに際してTLKのインストール・リムーヴを誤りなく行えるようにインストーラを作成する。
- インストーラ上にTLK使用許諾に関する文章を表示する。
- インストーラのライセンスをアップル社より取得する。

(iii)ユーザとの窓口、配付の仕方
- ヴァージョンアップに関して、現在の登録ユーザーに変更点・配付時期等を文書でアナウンスする。
- TLK専用の電子メールアドレスを設け、ユーザーとの連絡窓口とする。
- TLKに関するアナウンスや問い合わせなど、登録ユーザーや関心を持つ人との直接的な接触が可能となるため、大谷大学のホームページの中にTLK関連のページを設ける。そしてさらにはそのページからTLKの登録・ダウンロードなどができるようにする。

このヴァージョンアップはできるだけ早く完成させなければならなかったため作業を急いだが、本年度内に完了することはできなかった。TLK本体は使用可能な形になっているが、マニュアルの作成・印刷が想像以上に手間取ってしまったからである。来年(1998年)度の早い時期に完了できればと願っている。

TLKを利用したチベット語文献の入力については、昨年度の『プトン仏教史』に引き続き、今年度はチベットの著名な仏教僧で詩人でもあるミラレパの自伝を入力している。アルバイトも加えた五人程が分担して入力作業をしている。本年度末の段階でほぼ全体の入力が終わった状態である。

本年度を振り返って、パーソナルコンピュータのソフトの開発は想像以上に大変な仕事であることを改めて痛感した。OSのヴァージョンアップなどの外的な要因に大きく左右されること、開発作業の途中で予期しない問題が次々起ることなどである。しかし、ユーザーからのお礼や激励の言葉に励まされながら、本研究班のTLKのヴァージョンアップの作業は続いている。

委託研究

大蔵経学術用語研究
—『大正新脩大蔵経』経集部関係典籍における学術用語の研究—

研究員・チーフ　福島　光哉
（仏教学）

本研究は、仏教典籍の一大叢書である『大正新脩大蔵経』の学術用語の研究を通して、人類の貴重な知的文化遺産である仏教を広く世界に公開することを目的としている。『大正新脩大蔵経』は、今日漢訳された経律論を収録する大蔵経としてはもっとも整備されたものである。それ故、今日では何らかの形で仏教研究に携わるものにとっての標準として全世界の仏教研究者に利用されている。一口に仏教研究といっても様々な関心の持ち方の違いや、目的の相違があり、『大正新脩大蔵経』は極めて多様に利用されている。それ故、東洋的な英知の結晶であり膨大な量と無尽の内容を含む大蔵経が幅広く多くの人々に利用できるようにするために様々な工夫が為されてきた。その代表的なものが『大正新脩大蔵経索引』である。

『大正新脩大蔵経索引』は、一応、索引という名称を持ってはいるものの、一般にいう索引とは大いに内容を異にしている。一般の索引が本文の内容の検索のためのものであるのに対し、『大正新脩大蔵経索引』は、検索よりもむしろ内容の紹介に力が注がれているのである。本書の１、収録典籍解題　２、凡例　３、音次索引　４、分類項目別索引　５、検字索引という構成がそれをよく表している。このような状況にたって本研究の意義を鑑みれば、世界的な視野では、大蔵経が幅広く利用されるための手だてをつくすことであり、当面の課題としては、『大正新脩大蔵経索引』の内容の再検討ということになるのである。

本研究は、1995年度から３年計画で始められらたものであり、今年度はその最終年度にあたる。従って当面する課題としては、これまで２年間に検討を重ねて吟味してきた『大正新脩大蔵経索引第９巻経集部下』の訂正部分をどのような形で改訂新版に表現するのかという事である。経集部収録の経典群は、内容的にきわめて多岐にわたり、現在の研究水準から見ても内容を明確に把握しにくい経典が多数収められている。これは大乗仏教の幅広さを物語る証拠として、特筆すべき点である。しかしながら、仏教研究はもともと個人的な関心を基盤として成立しているため、ここに収められる経典群が学会の表舞台で大いに議論の対象となっているといった状況はほとんど感じられない。それだけに大乗仏教の広大さを感じるきっかけとして経集部収録経典を改めて注目していくための材料を提供したいとの願いが本研究には込められている。これまでに検討を加えてきた結果、現行の索引には根本的に改訂を加えなければならないほどの重大な問題は見つからなかったが、誤植や体裁の乱れなどの細かなミスが見つかった。これをどのように訂正するかは出版社の側の方針もあり、微妙な調整を必要とする。そのための具体的な方法については多少傍論にわたると思われるのでここでは省略する。

次ぎに、もう一方の大蔵経の普及という観点からの研究についてまとめておきたい。この点に関して進めている研究は２つある。第１に他の仏教系５大学と協力して『大正新脩大蔵経』の基本的な典籍に関する入門用の解説書を出版することである。ここで改めて問題にするまでもないことであるが、近年高等教育の大衆化に伴って様々な入学動機を持った学生が大学に入学するようになった。そして彼らに共通して言えることは、様々なメディアの発達の中で学生の活字離れは著しいということである。そうした人たちに大蔵経に触れてもらうためには一体どうすればいいのか。まずわかりやすい解説書を作成しようという動機で、1994年度から始められたものである。『大正新脩大蔵経』に収録されたおよそ3000にわたる典籍の中からおよそ450ほどの典籍を選抜し、それらの大小を問わずおよそ1000字ほどでその典籍の主な内容が把握できるようにと工夫されたものである。仏教書解説辞典は本書のほかにもいくつか存在するが、本書の価値は初心者に対して編集されたものであるという点である。１冊の辞典で全ての需要に応えることは、本来不可能である。そこで本書はこれから仏教を学ぼうとする人を主な対象に、専門の研究者にとっては備忘的な用途に応えるよう、必要最小限の記事をわかりやすい文章で表現することに努めたのである。本学が執筆を分担したのはこの内の67典籍である。原稿を提出してから多少の時間が経過したが、他大学と歩調を合わせて行う事業でもあり、現在、文体の統一などを含めて細かい調整を行っている。

大蔵経を普及するための研究の第２点めは、大蔵経本文のテキストデータベース化である。この点については一昨年度の研究所報（NO. 35）に主な点については関説したので、本年の進展について触れておきたい。大蔵経のテキストデータベース化は、現在わが国ではほぼ個人

的な関心に従って様々なところで行われている。さらに韓国や台湾でも同種の作業が行われており、全体がどのような方向に向かっていくのか見通せないほどである。このような状況の中で当面は『大正新脩大蔵経』のデータベース化に協力し、応分の責任を果たしていこうというのが本研究の態度である。そこで、現在わが国におけるこうした作業の実質的な中心である東京大学インド哲学仏教学研究室と相談して、本学が今後作業を担当する典籍を具体的に決定した。それは大蔵経10巻分ほどに相当するが、その中の47巻と49巻所収の典籍のデータベース化を推進した。実際の作業は、スキャナーで読み込んだ画像をOCRソフトで読み込み、読み込んだテキストデータをワープロを使って整形した後に印刷し、それに校正を加え、最後にテキストデータとして完成する、というものである。大蔵経のB4の紙面1ページをスキャナーで画像として読み込むとおよそ1Mバイトの情報量となる。現状のスキャナーは移動使用には耐えられないので、紙面の読み込みは専用の装置が設置してある研究室に限られるが、OCRソフトでの読み込みは携帯用のノートパソコンでも可能である。そして一旦テキストデータとして読み込んだ紙面は通常のフロッピーディスク1枚に数100ページの保存が可能である。これらの条件をふまえてどのように作業を進めていくのが最も合理的なのか、試行錯誤を続けている。

現在は具体的な作業に関する問題と同時に、こうした一連の作業の最終的な目標をどこに設けるかについて、文字の問題・表現形式の問題・出版物としての『大正新脩大蔵経』との関係をどのように理解すべきなのかといった観点からの検討を進めている。

1998(平成10)年度「一般研究」研究結果概要

共同研究

清沢満之の研究—清沢満之全集編纂のための研究—

研究代表者　小野　蓮明
(真宗学)

これまでも真宗学科が中心となって清沢満之の研究が進められ、その中で清沢研究の基本資料である全集の必要性が指摘されてきた。特に既刊の全集（3巻本、6巻本、8巻本）には収録されていない未発表資料の発見があったことや、訂正すべき箇所が存在することなどから、新しい全集の刊行が望まれている。その際、改めて清沢の自筆原本との対校作業を経ることが期されるべきである。

本研究は、上記の課題をふまえ、以下の2点を目的として立てた。

①全集編纂の研究、a全集の基本構想案の作成、b電子出版に関する研究
②資料の調査研究、a西方寺を中心とする資料の調査および整理、b資料の対校作業

この中で、自筆資料の調査を最優先して進めた。特に西方寺での調査は昨年度からの作業を承け、西方寺の全面的な協力を得て、清沢の自筆原本の所在を確認する作業に入った。調査のための出張は都合7回に及んだ。

具体的には8巻本と対比する形で作業を進めたが、雑誌（『精神界』や『無尽灯』など）に発表された論文については、自筆原稿が残っていないことが判明した。また清沢の随想ともいうべきもの（たとえば『有限無限録』や『転迷開悟録』など）や日記類（『臘扇記』や『病床雑記』など）については、所在を確認し、全集との異同について見ることができた。ただし、『当用日記』については、所在確認ができなかった。さらに、全集所収の書簡類については大部分の所在が確認できなかった。

また、新たな発見としては、清沢自身の大学時代の受講ノートが数十冊も残されていることであった。これは全集に収録すべきかどうかは別に検討が要されるが、当時の帝国大学の授業について知ることができる貴重な資料と言える。

このような作業を通して、今後さらに詳細な対校作業を進めるため、および資料の保存のためにデジタル画像化していくために、今後は全資料の撮影が不可欠である。

尚、8巻本所収の原稿についての所在一覧については、利用に供するような形にまとめた。

＊『紀要』17に研究成果発表済。

共同研究

初期無量寿経の典籍・思想研究

研究代表者　加来　雄之
(真宗学)

現存する七種の漢訳〈無量寿経〉は、〈初期無量寿経〉と〈後期無量寿経〉に分けることができる。本研究は、この〈初期無量寿経〉に属し、二十四願経と呼称される『無量清浄平等覚経』と『大阿弥陀経（諸仏阿弥陀三耶三仏薩樓仏檀過度人道経）』の2経の典籍解読ならびに思想史的研究にある。二年目にあたる一九九八年度は、『大阿弥陀経』の検討会を通した解読テキストの作成を継続しつつ、思想研究に中心を移して研究会を予定であった。しかしながら、大学の諸般の事情で検討会は開催できなくなった。今年度は、研究員が個々の課題をもって研究を持続することになった。

上記の理由で、研究課題であった『大阿弥陀経』の基礎解読テキスト作成は少し遅れることになる。テキスト作成のための準備（書き下し、現代語訳、註の下案の作成）はほぼ終えているが、今後、完成にむけて研究員による検討会を集中的にもたなくてはならないだろう。ただ古田研究員による訓読は、今後『初期無量寿経』を研究する初学者にとって大きな指針となることは疑えない。また親鸞の高弟であった高田の真仏の書写になる『大阿弥陀経』が影印で公表される予定があると聞く。それらの出版をもち、文字ならび訓の校訂をぜひとも行いたいと思う。そのため少し時間はかかるであろうが準備をすすめ公表していきたいと思っている。

加来研究員からは、初期無量寿経の思想がどのように浄土教理解に影響をもったかについての報告がなされる予定である。例えば、『大阿弥陀経』の二十四願の構成が独特であることは従来から注目されているが、他本との比較という視点はあっても、『大阿弥陀経』自身の思想構造として明確にされることは十分ではなかった。

また、この2経は、龍樹の『十住毘婆沙論』、曇鸞の『論註』における浄土教理解についての影響や、また魏訳『仏説無量寿経』の註釈への影響がみえる。周知のようにとくに日本の法然、親鸞の思想形成においては大きな役割を果たしている。このように浄土教形成に果たした2経の役割が教学的に解明されてきたとはいいがたい。これについては『大無量寿経』の注釈書における影響についてはほぼ検討を終えた。

宮下研究員からは、2経典のそれぞれの思想的特質と両経典の関係、ならびに訳語・思想背景などについての思想的解明をおこなったうえで、大乗仏教の初期の段階において浄土の概念どのようなに形成されていたのかについて報告がなされる予定である。

共同研究

唐代仏教石刻文の研究

研究代表者　大内　文雄
(東洋史学)

本研究班が、唐代仏教石刻文の解読作業を推進する際に用いた方針は、原拓、或いは影印が存在し、それによって文字資料としての原形が確認し得るものを対象とすることであった。一九九八年度においては、比較的に短文の塔銘、墓誌等に解読の対象を絞り、下記の都合一五種を選んだ。稀に行書の風を含むものがあるが、概ねは謹直な楷書で記されている。それぞれには、各担当者による釈文、訓読と詳しい語注が施され、それらが研究会資料として毎回配布され、それによって活発な討議が行われた。

一、　楊居士塔銘
　　貞観一八年（六四四）三〇行、行三〇字
二、　済度寺尼法楽墓誌銘
　　永隆二年（六八一）一九行、行一九字
三、　済度寺尼法灯墓誌銘
　　永隆二年（六八一）二〇行、行一九字
四、　比丘尼法琬法師碑
　　景龍三年（七〇九）三〇行、行五四字
五、　崇義寺思言禅師塔銘
　　開元二年（七一四）二三行、行二一字
六、　六度寺侯莫陳大師寿塔銘
　　開元二年（七一四）五三行、行二〇字
七、　浄域寺法蔵禅師塔銘
　　開元四年（七一六）三六行、行三〇字
八、　浄業法師霊塔銘
　　開元一二年（七二四）二六行、行二四字
九、　大薦福寺思恒律師誌文
　　開元一四年（七二六）二八行、行二八字
十、　褒義寺敬節法師塔銘
　　開元一七年（七二九）二六行、行二三字
十一、興聖寺尼法澄塔銘
　　開元一七年（七二九）二五行、行三二字
十二、景賢大師身塔石記
　　開元二三年（七三五）三〇行、行二一字
十三、義福禅師塔銘
　　開元二四年（七三六）二四行、行二四字
十四、大安国寺尼恵隠塔銘
　　開元二六年（七三八）二八行、行一八字
十五、優婆夷未曾有功徳塔銘
　　開元二六年（七三八）二七行、行二四字

これらの内容を簡単に紹介すると、二、三の墓誌、四の碑を除けば他はすべて塔銘である。また全十五種の中、二、三、四、六、十一、十四は尼、一は居士、十五は優婆夷のものとなっている。法楽・法灯・法琬は名族あるいは宗室の女性、敬節・優婆夷未曾有も名族の出身である。侯莫陳・思恒は禅の神秀に関わり、優婆夷未曾有は義福に関わる。また尼法澄は華厳の賢首法蔵に関係する。更に法蔵は三階教の、浄業は善導浄土教の重要史料である。これら種々の石刻文を読むことによって唐代仏教の多様性の一端を知ることができると考えている。なお解読された資料はその都度パソコンに入力保存され、次年度における刊行に備えている。

＊『紀要』17に研究成果発表済。

個人研究

韓国の龍に関する研究
—歴史性と民族性について—

研究代表者　チョン　チョミョ(鄭　早苗)
(東洋史学)

宗教儀式における様式や装飾にどのようなものが使われてきたのかということに関しては、遺跡、遺物、壁画、文献をもとにある程度把握することが出来る。しかし、韓国の佛教に関しては、例えば拝礼の回数や、五体投地をいつまで行っていたのか、献花の過程や状況、僧侶と一般信徒との位置関係等不明な点は多い。また、古代韓半島の遺跡から出土する遺物、たとえば、短剣、瓦、竈、馬鐸やノロ、牛、豚などの骨などが具体的にどのような役割を担うものとして埋葬されたのかも推定の域を出ない。高句麗や百済、伽耶地域などの壁画古墳絵画のモチーフに関してもその意味するところが把握されているわけではない。

宮殿内の装飾だけでなく、仏教寺院、道教寺院などの装飾として共通して今も絵画や彫刻に用いられているのは龍の意味を知りたいと思い、韓国の龍を取り上げて研究してみようと考えたのが今回のテーマである。東アジアの龍の源流は中国に求められ、中国では、甲骨文字のなかに龍に相当する文字が見出せるので、殷王朝の頃から龍の「存在」が知られていたことがわかる。その初期の形は蛇の胴体に角をつけた象形文字だとされる。また殷代の青銅器のリアルな龍の模様から、中国の龍の原型の姿はこの時代に形作られたとみなされている。前漢初期の長沙馬王堆1号墳の木棺の覆いにも龍が描かれ、龍にたいする関心が皇帝を中心とする範囲だけでなく、支配層にとっては幅広く知られていたことが遺物から理解されるところである。四霊といわれる麒麟・鳳凰・亀・龍のなかで、十二支に龍だけが選ばれたのは、龍が王権と結びついたからではないかといわれているが、王権と結びつく龍の存在を支持する階層が登場していたということであろう。龍は、そのモデルとして蛇、鰐、稲妻、虹などが挙げられてきたが、4神と称されてきた他の玄武、白虎、朱雀、と比較して見ると関連するモデルから、水の神とされ、また農業生産の上からも特別に龍が王権と結びつく権威の象徴として迎え入れられてきたようである。例えば漢の高祖はその母が龍と交わって産んだ子であると記されているが、この伝説が記述された頃には龍が水を左右する神であり、その龍と直結することが皇帝の権威づけに必要とされていたという考えが定着していたものと見なされる。龍は水と関連するモデルを原型としながら、さらに空をも駈けるという観念が固定してくるなかで、天上にいる神の意志の伝達者であり、水の神という信頼性が龍を王権と結びつけ、このような思想が、漢の4郡設置など、中国王朝と直接関わりを持つことになった古代韓半島の人々の思想に大きく影響が与えられ、朝鮮古代諸王朝の王権確立とその権威付けに影響力を発揮したものと考えられる。

民間でも、龍が水と関係を深くもつものと考えられ、民間説話に見られるように雨を降らしたり、時には洪水を起こす存在として語られてきた。黄河の神の河伯は龍であるとされ、雨乞いや洪水の時は河伯の龍に牛や馬の犠牲を供えて祈ったのである。龍と雨との関係は中国、韓半島、日本、東南アジアの各地の祭りで今も見られるように、布や木材などの色々な素材を用いて龍の姿が作られ、現在も祭りの主題にもなっているほどである。古代朝鮮三国には多くの龍の史料が散見する。これらの龍の史料は上記した龍の要素が含まれる場合もあるし、そうでないものもある。歴史的に韓半島において、中国思想がどのように伝えられ、固有の考え方に影響を与えて来たのかを知る一つの手がかりとして龍を題材にして、神仙思想や道教の問題にまで言及したものである。

＊『紀要』17に研究成果発表済。

1998(平成10)年度「指定研究」研究経過報告

特定研究

大谷大学近代史研究

研究員・チーフ　武田　武麿
(宗教学)

本研究は、大谷大学史編纂を目的として各年度ごとに中心課題をもって調査、研究を行い、大学史の完成を目指している。以前より大学史編纂を目的として基礎作業を行うべく、指定研究の特定研究として組織されてきたが、1998年度よりは大学史編纂の具体的作業に入るべく研究班名を「大谷大学近代史研究」とし、研究課題も「大谷大学近代100年史の編纂と史料収集」と具体的目標をかかげるものとなっている。一方、大学史編纂の基礎となる学内外の関連資料の収集、整理にも力を入れ取り組んでいる。

まず会議および研究会を下記のように行った。

1998年

第1回4月14日(火) 12：30～　於第3会議室
　本年度研究計画の打ち合わせ

第2回5月11日(月) 14：00～　於大学史編纂研究室
　大学史関係資料の整理および確認
　研究室移転の検討

第3回5月18日(月) 14：00～　於大学史編纂研究室
　大学史研究関係文献目録の更新の検討
　研究室移転の検討

第4回5月26日(火) 15：00～　於大学史編纂研究室
　大学史関係資料リスト作成の検討
　研究室移転作業

第5回6月22日(月) 15：00～　於大学史編纂研究室
　大学史関係文献目録の作成
　年度別大学史関連資料の整理の検討

第6回7月13日(月) 17：50～　於小会議室1
　前期の活動報告
　今後の活動計画の検討
　　①公刊書の関係資料の収集
　　②図書館所蔵資料の整理
　大学史資料協議会出張報告

1999年

第7回3月15日(月) 17：00～　於大学史編纂研究室
　今年度の研究報告
　今後の研究計画の検討
　　①次年度の研究計画
　　②大学史編纂の構想
　　③大学史編纂の刊行計画
　　④大学史関係資料の整理計画の検討

第8回3月25日(木) 16：00～　於大学史編纂研究室
　大学史編纂計画の検討
　　①時代区分の検討と確認
　　②編纂状況の広報の検討

第9回4月6日(火) 13：30～　於大学史編纂研究室
　学外資料の調査報告
　　東京都立公文書館所蔵資料

次いで学外学会では10月30日(水)～11月2日(金)に愛媛大学を会場として開催された全国大学史資料協議会に参加し、基調講演と各分科会での大学史編纂および資料の収集・整理の実状と問題が検討され、大いに参考となった。また資料収集では、学外の資料調査を適宜行ったが、前年度より実施している図書館所蔵の学事関係資料を調査、整理およびデータベース化を継続した。

以上、1998年度は前年度より継続された図書館所蔵資料の調査、整理およびデータベース化が主な仕事となったが、後半期は大学史編纂の具体的計画と内容構成の検討を行い、次年度の大学史編纂の具体的日程のたたき台が提示されたものと考える。

特定研究

国際仏教研究
—諸外国における仏教研究の動向と展開の研究—

研究員・チーフ　安冨　信哉
(真宗学)

本研究は、諸外国における仏教研究の動向を把握するとともに、仏教研究、ことに浄土教研究の成果を国際社会に発信することを目的としている。

近年の仏教研究は、欧米社会において、その方法論を

含めて多様化している。これら海外における仏教研究の動向を把握し、共有することは本学の仏教研究にとっても必要不可欠である。また、国際社会にむけて浄土仏教の思想研究を発信・紹介することは、日本の精神文化を海外に伝えていく上でもたいへん重要な意味を持つと思われる。

本研究では、このような課題に、受信と発信という二つの側面から応えていきたいと考えている。まず受信については、従来からの研究の継続として、海外における仏教研究の動向の把握と、学内におけるその共有を課題とする。また、発信については、特に真宗教学の海外への紹介を目的として「近代真宗教学アンソロジー（仮題）」の作成を目指すとともに、海外の他大学との交流や国際学会への参加によって、本学における仏教研究の公開をはかりたいと考えている。

本研究班では、このような課題のもとに、下記の通りに項目を立てて研究を進めている。各研究課題と本年度までの研究経過は以下の通りである。

①近代真宗教学翻訳研究

近代の真宗教学思想を翻訳し、欧米に紹介することを目的としている。これは、教学思想の紹介を第一の目的としたものであるが、世界に向けた真宗の公開という使命をになったものであると考えられる。その際、近代の大谷派真宗教学を代表する四人（清沢満之・曽我量深・金子大栄・安田理深）の重要な論考を何点か選び、翻訳することとした。

本年度の翻訳検討会、並びに翻訳の進捗状況は、次の通りである。

◆清沢満之の論文翻訳検討会

講　師：マーク・ブラム（フロリダ・アトランティック大学教授）

検討会：5月15日(金)／6月12日(金)／
9月17日(木)／10月15日(木)／
11月12日(木)／12月17日(木)／
1月14日(木)／3月9日(火)
—各回2時間程度—

成　果：「宗教的道徳と普通道徳の交渉」「我が信念」の翻訳完成

◆曽我量深の論文翻訳検討会

講　師：ヤン・ヴァン・ブラフト（南山大学名誉教授）

検討会：4月23日(木)／5月22日(金)／
6月19日(金)／9月18日(金)／
10月9日(金)／11月6日(金)／
12月18日(金)
—各回2時間程度—

成　果：「地上の救主」「親鸞の仏教史観」の翻訳完成

◆安田理深の論文翻訳検討会

講　師：ポール・ワット（デュポー大学教授）

検討会：6月23日(火)／6月24日(水)
—各回3時間程度—

成　果：「名は単に名にあらず」の翻訳に着手中。

②ルドルフ・オットー・シンポジウム研究

1999年5月に、ドイツ・マールブルク大学において開催される「真宗と福音主義神学との対話」に向けての基礎研究。同シンポジウムは、大谷大学によってヨーロッパに真宗教学が紹介される最初の機会であり、またキリスト教と真宗の初めての本格的な出会いであるとも了解される。今後の双方の宗教間対話の継続に向けても、非常に大きな意味を持つシンポジウムであると考えられる。本研究では、福音神学と真宗教学の対話の論点整理や、同シンポジウムにおける真宗理解の基本テキストとなる『唯信鈔文意』のドイツ語訳の作成が重要課題となる。

本年度の研究経過は、下記の通りである。

◆シンポジウムに向けての発表者を中心とした研究会の開催。

◆ドイツ語訳『唯信鈔文意』の翻訳完成。

③日韓仏教信仰比較研究

韓国の東国大学との浄土思想を中心とした共同研究の推進。本年度の東国大学との交流は、下記の通りである。

◆延塚知道・鄭早苗研究員の東国大学への派遣と、共同研究協議会への出席。

④英訳蓮如論集研究

蓮如を欧米に対して紹介することを主眼とし、そのための論文の翻訳等を進める。本年　度の研究状況は、下記の通りである。

◆蓮如論集（'The Study of Rennyo' 仮題）の翻訳作業への着手

⑤基礎研究

受信によって構築された海外仏教についての情報の公開。

⑥その他（国際学会への参加や、本学における学会開催の検討）

学会等への派遣については、次の通りである。

◆第4回国際法華経学会（オランダ・ライデン大学）に、ロバート・F・ローズ研究員を派遣。

◆Pacific Neighborhood Consortium（台湾・台北市）に宮下晴輝所長を派遣。
◆Association for Asian Studies（アメリカ・ボストン／ニューヨーク等）ロバート・F・ローズ研究員を派遣。
◆第3回ルドルフ・オットー・シンポジウム開催準備（ドイツ・ハイデルベルク）に大河内了義研究員を派遣。
◆同上目的によって、加来雄之主事をマールブルクに派遣。
◆同上目的によって、箕浦恵了・木越康研究員をマールブルクに派遣。
◆嘱託研究員アルフレッド・ブルーム博士の仏教伝道文化賞授賞式（東京）へ、安冨信哉研究員の派遣。
◆ハーバード大学ライシャワー研究所との交流に向けての会合並びに研究所視察に、宮下晴輝所長・加来雄之主事を派遣。

特定研究

蓮如研究
—現代における真宗の再興—

研究員・チーフ　鍵主　良敬
（仏教学）

本研究は、一昨年度よりの継続研究である。「現代における真宗の再興」という研究課題のもと、3つのプロジェクトを立ち上げた。その内、第1の論文集の刊行は昨年度内に所期の目的を遂げた。残る2つの課題、すなわち『御一代聞書』解説書の作成、および定本「七祖聖教」の編集の作業を今年度は進めた。

『御一代聞書』解説書に関しては、昨年度中にテーマを立てて原稿依頼をし、20名の方々に分担執筆をいただいた。原稿については、ほぼ予定通りに集めることができた。ただし、形式や語調や表記などを整える作業にかなり手間取った。また、資料篇として『御一代聞書』の本文に註を加えて収録するための作業をあわせて行ったが、これまで十分明らかでなかった蓮如の事跡についても再調査をしたため、原稿化は予定よりも大幅に遅れた。ただ、東本願寺出版部の高配をいただき、宗派の教化事業の一助として役立てていただくことになった。入稿はすでに終わっているので、今年中には発刊される予定である。

今ひとつの課題である定本「七祖聖教」の編集については、当初は南条神興本を底本として作業を進める予定であった。ただし、宗祖の加点本が遺されているものについては、加点本を底本とする方針も確認されていた。昨年度来、善導の5部9巻の中でも、特に『観経疏』について、南条本と加点本の文字の異同を確認する作業を進めてきたが、それを通して七祖の全体について、底本そのものの再検討の必要性が大きくなってきた。また、すでに刊行されている他の「七祖聖教」についても検討を加えてきた。その作業の中から改めて確認したことは、

・単に加点本を翻刻するのみであるならば、大谷大学が編集する意味はなくなってしまうこと。
・大谷派における定本として編集する場合にも、訓読の根拠を明確にしないと、学問的研究資料とはなり得ないということ。

であった。ここから、加点本を底本として、それに文字の異同などを註として加えていく作業をより徹底していくこととなった。さらには、加点本が現存しないものについては、底本を決定するための研究を進めることになった。この意味では、本プロジェクトは「七祖聖教」編集のための基礎作業の途上にある。

委託研究

真宗史料研究
—『園林文庫』目録データベースの作成—

研究員・チーフ　木場　明志
（国史学）

本研究班に委託されて進めてきた東本願寺所蔵『園林文庫』整理作業は、1991年度からの継続研究である。1953年に緊急の要があって作成された『園林文庫目録』（2冊、旧目録と通称する）をベースに、改めて『園林文庫』史料の点検・整理を徹底的に行って、新規に目録データベースを作成することを最終目的としている。

作業は、『園林文庫』史料の1点ずつについて詳細に調査し、調査内容を所定の調査カードに記入する部門と、さらにそのカードに基づいて調査データをパソコンに入力し目録データベースに仕上げていく部門とに分かれる。

当然、前者部門が先行し後者部門が後を追うことになるが、当該史料は書簡・手控え類まで含む極めて広範な内容をもっており、そのために前者部門については古文書・くずし字の解読に関する高度な能力を必要とする作業となる。そのために、作業能率は多く作業担当の人材確保如何に左右される状況が続いてきた。すなわち、本学博物館学課程履修中の学生を中心とするアルバイト員に頼って作業が進められてきた経緯のなかで、人材に恵まれた年度と必ずしも恵まれなかった年度、あるいは人材養成に比重がかかった年度などがあり、また整理しようとした史料そのものの難易によっても大きく能率は規制されてきた。そうしたなかで、1998年度は前者部門の最終点が見えるところまで作業を進め、明確な作業終了の目途が立てられるようになることを目標としてきた。

また、後者部門についても、パソコンに習熟した人材を必要とするのみならず、調査カードのデータそのものにも通暁していなければ入力が正しく行われないという制約上、これまた年度によって作業進展にバラツキがあったところであるが、1998年度においてはほぼ調査カードのでき上がりを追ってカード点検と入力に回せる態勢に近づくことができた。

次に、1998年度末までの作業達成状況を一覧する。

年　度	作成調査カード数	作業達成率 収納箱数基準	作業達成率 旧目録点数基準
1991 (年度)	4242 (枚)	11.54 (%)	14.42 (%)
1992	4352	11.54	12.07
1994	3395	7.14	11.92
1995	4297	8.79	11.56
1996	2943	6.04	7.44
1997	3392	12.64	12.07
1998	6001	12.64	5.18
累計	34589	82.42	91.83

上記によって、1998年度の作業達成状況を報告すれば、調査点数（調査カード数）は従来のどの年度よりも多かったことになる。『園林文庫』史料は収納箱数にして182箱であるので、箱数を基準に達成率を計算すれば別段多いことにはならないが、小さい形態の史料が箱一杯に詰まっていたことを示すものである。また、1953年作成の旧目録では史料の総点数を5312点としており、それを基準とした場合の達成率では過去最低となるが、いかに「1包」「1袋」などと大ざっぱにしか数えられていなかったかを如実に示している。

かようなわけで、累計では作成調査カード数は3万4千点を越え、作業達成率においても先が見える状況にまで至ってきた。とはいえ、このままでは旧目録点数からは可能に見えても、収納箱数基準で見るならば、次年度においても100%に至るのは数字上困難でないかと見えるかもしれない。しかしながら、未調査分は箱数で32箱もあるとはいえ、その内の8箱は元来目録外の燃え残りなど解読不能あるいは解読を必要としない史料であり、実質は24箱である。24箱といえば全体の13%程度であって従来の達成率からは十分調査可能の範囲内にある。次年度を最終年度と位置づけて態勢をさらに強化して取り組むならば、作業の完了は視野の内にあるといえるところに来ていることになるであろう。

なお、東本願寺に別置された形の『園林文庫』史料が存在することがわかったので、それについては研究班員が赴いて仮目録を作り、それに基づいて大谷大学への調査のための移管手続き書類を真宗総合研究所において作成し、作成書類を東本願寺に提出して実際の史料移管を実施することにした。収納箱数で2箱、史料点数で約80点である。次年度早々にでも移管を実施し、現在の作業の終了を待って引き続いて調査をすませる方針を立てている。

本年度は、以上のようにこれまでにない急ピッチでの作業進行が行えたが、これは昨年度（1997年度）を最後の山場と考えて調査・整理に手間がかかりそうなものを済ませておいたからにほかならない。それは調査カード数と達成率との数字比較に明確に表われており、調査点数が多かったから作業が進んだとは一概にいえない史料の状況を端なくも示すことになっている。

また、本年度後半においては、調査部門の終了を見通して、目録データベースの最終的な形についての構想を考えることにも着手してきている。データの細目については整理作業の3年目くらいに試行錯誤の中からほぼ成案を得て進行してきたが、全体の史料分類項目やデータ索引の範囲について、今少し考慮の必要があるのではないかと考えている。全体が見渡せて、なおかつ各史料についての豊富な情報を有するデータベースの構築を目指したく思うところである。最終的には約4万点の史料につき、1点ずつの詳細データが引き出せる形態を考えねばならないことから、MOを用いてのデータベースとする意向である。そのためのコンピュータ設備は昨年度末から整備してきており、今後とも工夫を重ねながら利用しやすいデータベースの作成に尽力していかねばならないと思っている。

委託研究

西蔵文献研究
—大谷大学所蔵の北京版大蔵経および蔵外文献の研究—

研究員・チーフ　片野　道雄
(仏教学)

本研究は、大谷大学図書館が所蔵するチベット語文献を整理・研究すると共に、貴重な文献を内外に紹介することを目的にしたものである。1998年度は、北京版西蔵大蔵経の丹殊爾勘同目録の第九分冊（Ⅱ－3、最終冊）の校正と、パーソナルコンピュータ・マッキントッシュ用のチベット語システムの改良とそれを利用した西蔵文献目録の電子版の作成を行った。

(1)丹殊爾勘同目録に関しては、遅れていたⅡ－3（律疏部・本生部・書翰部・因明部・声明部・医方明部・雑部）の校正作業が終了した。何とか本年度内の発行を目指したが、予想以上に校正に手間取ったため、発行は来年度の初めにずれ込むことになった。

(2)パーソナルコンピュータ・マッキントッシュ用のチベット語システム Tibetan Language Kit for Macintosh（TLK）は、すでに内外のチベット研究者等に無料で配付され、使いやすいと好評を博している。しかし、昨年、マッキントッシュのOSとその機能拡張ソフトがヴァージョンアップされたため、既開発のTLKは新しいOSには対応しないことになった。利用者からそのことの問い合わせもあり、早急に、新しいOSに対応するよう当該チベット語システムをヴァージョンアップする必要が出てきた。そのため、本研究班では昨年度よりヴァージョンアップの作業を進め、その作業はほぼ終了に近い段階にある。ヴァージョンアップによる大きな変更点は次のようである。

・マッキントッシュOS8.0に対応。
・インストールとリムーヴを誤りなく行えるようにインストーラを作製。そのために、インストーラのライセンスをアップル社より取得。
・インストーラの上にTLK使用許諾に関する文章を表示し、TLKの著作権や使用に伴って生ずる恐れのある損害について当方に賠償責任のないこと等を明示。
・従来のKailasaフォントのほかに、新たに木版の字体に似たKokonorフォントを追加。
・新ヴァージョン用のマニュアル（冊子体）の日本語版・英語版を作製。

このヴァージョンアップは、すでに新しいOSが相当程度普及しているため、早急に完成させなければならなかったので、昨年度から優先して作業を進めてきたものであった。本年度の初めには、冊子体のマニュアルの印刷も終わり、配付に向けての準備はほぼ整った。しかし、配付のために最終チェックの段階で、インストーラに少しバグがあることが判明した。現在そのバグの修正作業の最中である。ただ、そのバグの程度はTLKの使用ができないほどのものではないため、これまでのTLKの利用者などの中で新ヴァージョンを希望する者には不具合の内容を説明したうえで個別に配付している。

このようなヴァージョンアップの作業と併行して、TLKの登録ユーザーや関心を持つ人たちのために窓口として、今年度からTLK専用の電子メールアドレス（TLK@cri.otani.ac.jp）を設けて、それぞれの問い合わせに対応している。そこには、既登録ユーザーからの問い合わせとは別に、新たにTLKに興味や関心を持った人たちから多くのメールが寄せられている。特に外国からのものが多く、TLKの入手方法や費用などを尋ねている。その際、TLKを無料で配付していることは非常に喜ばれている。当方でそのつど判断しながら、必要に応じて希望者に郵送している。

メールで寄せられる要望の中には、希望者が直接にTLKをダウンロードしたいというものが多い。したがって、今後は真宗総合研究所のホームページの中にTLK関連のページを設け、そのページからTLKを直接ダウンロードできるようにすることが望ましいであろう。また、そのようなページが設けられると、TLKに関する情報をアナウンスすることや、TLKの登録ユーザーや関心を持つ人たちとの直接的な接触も可能となるであろう。

(3)次に、TLKを利用したチベット語文献の入力については、昨年度に入力した『ミラレパ自伝』の校正を行い、テキストとして用語検索などに利用できるような形にすることが終了した。これによって、『プトン仏教史』『ミラレパ自伝』の二つの電子テキストが利用できるようになり、希望者にフロッピーディスクの形で配付する予定である。

本年7月26～31日、アメリカのインディアナ大学において第8回国際チベット学会が開催され、当研究班からは白館戒雲研究員と今枝由郎嘱託研究員が参加した。その際、白館研究員は“rje Tsong kha pa'i gshung du gsal ba'i bka' bstan lung 'dren khyad chos（ツォンカパの著作に引用される経典と論書の特徴）”の論題で研究発表

し、学会終了後、アメリカとカナダの幾つかの大学に立ち寄り、当地のチベット研究の現状を視察した。また、今枝嘱託研究員は学会において新ヴァージョンのTLKを紹介し、チベット研究者たちと意見交換や情報収集を行った。

本年度を振り返ると、パーソナルコンピュータのソフトの開発・改良の作業には、そのスピードアップが求められるとともに、ユーザーとの接触やソフトの配付にインターネットの利用が欠かせないことが痛感せられる。したがって、当研究班としても早急にその体制を整えなければならないであろう。

委託研究

大蔵経学術用語研究
—『大正新脩大蔵経』経疏部関係典籍における学術用語の研究—

研究員・チーフ　一色　順心
（仏教学）

本研究は、『大正新脩大蔵経』の学術用語の研究を通して、人類の貴重な知的文化遺産である仏教を広く世界に公開することを目的としている。『大正新脩大蔵経』は、今日漢訳された経律論を収録する大蔵経としてはもっとも整備されたものである。それ故、仏教研究に携わるものにとっての標準として全世界の仏教研究者に利用されている。一口に仏教研究といっても様々な関心の持ち方の違いや、目的の相違があり、『大正新脩大蔵経』は極めて多様に利用されている。それ故、東洋的な英知の結晶であり膨大な量と無尽の内容を含む大蔵経が幅広く多くの人々に利用できるようにするために様々な工夫が為されてきた。その代表的なものが『大正新脩大蔵経索引』である。

『大正新脩大蔵経索引』は、索引という名称を持ってはいるものの、一般にいう索引とは大いに内容を異にしている。一般の索引が本文の内容の検索のためのものであるのに対し、『大正新脩大蔵経索引』は、検索よりもむしろ内容の紹介に力が注がれているのである。本書の1、収録典籍解題　2、凡例　3、音次索引　4、分類項目別索引　5、検字索引という構成がそれをよく表している。本研究の直接の目的は、『大正新脩大蔵経索引経疏部Ⅱ』の内容の再検討である。本索引は、全体では第20巻に相当し、本学が1981（昭和56）年に責任編集したものである。その内容は、大正蔵経35・36巻に、経疏部3・4としておさめられる以下の典籍の学術用語の研究の結果である。

35巻　1731　華厳遊意　1巻　（隋　吉蔵撰）
　　1732　大方広仏華厳経捜玄分斉通智方軌　10巻　（唐　智儼述）
　　1733　華厳経探玄記　20巻　（唐　法蔵述）
　　1734　華厳経文義綱目　1巻　（唐　法蔵撰）
　　1735　大方広仏華厳経疏　60巻　（唐　澄観撰）
36巻　1736　大方広仏華厳経随疏演義鈔　90巻　（唐　澄観述）
　　1737　大華厳経略策　1巻　（唐　澄観述）
　　1738　新訳華厳経七処九会頌釈章（唐　澄観述）
　　1739　新華厳経論　40巻　（唐　李通玄撰）
　　1740　大方広仏華厳経中巻巻大意略述　1巻　（唐　李通玄造）
　　1741　略釈新華厳経修行次第決疑論　4巻　（唐　李通玄撰）
　　1742　大方広仏華厳経願行観門骨目　2巻　（唐　澄観撰）
　　1743　皇帝降誕日於麟徳殿講大方広仏華厳経玄義一部　1巻　（唐　静居撰）

これらは、一見して明らかなように新旧両『華厳経』に対する注釈書群であり、『経疏部索引Ⅱ』音字索引432頁、その他203頁の合計635頁からなる。作業の主な内容としては、収録典籍解題の内容は、現在の学会の研究成果を十分反映しているか、凡例、音次索引、分類項目別索引、検字索引などの中に誤字脱字はないか、といったことが主な内容である。これらの作業の具体的な進め方などについては、あまりにも細部にわたるのでここでは省略するが、膨大な活字を点検する途方もない作業であることだけは記しておきたい。

次に、上記の研究作業と並行して進めていく研究として、大蔵経テキストデータベースについての報告をしておきたい。テキストデータベース構築に関する研究は、『大正新脩大蔵経』をより一般に開放し、利用の便宜を図って行われているものである。この点については研究所報（No.35）に主な点については関説したので、本年度の進捗状況について触れておきたい。大蔵経のテキストデータベース化は、現在わが国ではほぼ個人的な関心に従って様々なところで行われている。さらに韓国や台湾でも同種の作業が行われており、全体がどのような方向に向かっていくのかはっきりとは見通せない点があることは否めない。このような状況の中で当面は『大正新脩大蔵経』のデータベース化に協力し、応分の責任を果

たしていこうというのが本研究班の姿勢である。そこで、現在わが国におけるこうした作業の実質的な中心である東京大学インド哲学仏教学研究室と相談して、本学が今後作業を担当する典籍を具体的に決定した。それは大蔵経10巻分ほどに相当するが、その中の47巻と49巻所収の典籍のデータベース化を現在推進中である。

大正蔵経47巻は、諸宗部5に当たるが、その中には浄土教に関する文献を含んでいる。以下の通りである。

1957　略論安楽浄土義　1巻　(後魏　曇鸞撰)
1958　安楽集　2巻　(唐　道綽撰)
1959　観念阿弥陀仏相海三昧功徳法門　1巻　(唐　善導集記)
1960　釈浄土群疑論　7巻　(唐　懐感撰)
1961　浄土十疑論　1巻　(隋　智顗撰)
1962　五方便念仏門　1巻　(隋　智顗撰)
1963　浄土論　3巻　(唐　迦才撰)
1964　西方要訣釈疑通規　1巻　(唐　基撰)
1965　遊心安楽道　1巻　(新羅　元暁撰)
1966　念仏鏡　2巻　(唐　道鏡・善導共集)
1967　念仏三昧宝王論　3巻　(唐　飛錫撰)
1968　往生浄土決疑願行二門　1巻　(宋　遵式撰)
1969　A楽邦文類　5巻　(宋　宗暁撰)
　　B楽邦遺稿　2巻　(宋　宗暁撰)
1970　龍叙増広浄土文　12巻　(宋　王日休撰)
1971　浄土境観要文　1巻　(元　懐則述)
1972　浄土或問　1巻　(元　天如則著)
1973　廬山蓮宗宝鑑　10巻　(元　普度編)
1974　宝王三昧念仏直指　2巻　(明　妙叶集)
1975　浄土生無生論　1巻　(明　傳燈撰)
1976　西方合論　10巻　(明　袁宏道撰)
1977　浄土疑弁　1巻　(明　しゅ宏撰)
1978　讃阿弥陀仏偈　1巻　(後魏　曇鸞撰)
1979　転経行道願往生浄土法事讃　2巻　(唐　善導集記)
1980　往生礼讃偈　1巻　(唐　善導集記)
1981　依観経等明般舟三昧行道往生讃　1巻　(唐　善導撰)
1982　集諸経礼懺儀　2巻　(唐　智昇撰)
1983　浄土五会念仏略法事儀讃　2巻　(唐　法照述)
1984　往生浄土懺願儀　1巻　(宋　遵式撰)

以上29典籍約500頁分について、まずOCR入力し、画面上で修正を施してテキスト化した。今後、本文との校勘を施して、再入力し、整形した後、公開していく予定である。

第12回国際仏教学会参加報告

ロバート・F・ローズ

1999年の8月23日から28日のあいだ、世界中から250人以上の参加者を得て、スイスのローザンヌ大学で第12回国際仏教学会(The XIIth Conference of the International Association of Buddhist Studies)が開催された。この大規模な学会では44のパネルに分かれて、96人の研究者が研究発表を行った。真宗総合研究所からは、研究所長の宮下晴輝教授と筆者の2人が、国際仏教研究班の活動の一環として派遣され、発表を行った。宮下教授は、26日に設けられたPhilosophy(仏教哲学)のパネルで、説一切有部の三世実有説を克明に論じた"Vasubandhu's Standpoint in Opening the Problem of Sarvāstivāda"(「世親が三世実有の問題を論じ始めるにあたって取る立場」)を発表し、筆者もBuddhism and Pure Land(仏教と浄土)のパネルで、鎌倉浄土教の重要な先駆者である永観律師の教学について"Yōkan's Interpretation of Nembutsu Practice"(「永観の念仏観」)を発表した。また、大谷大学仏教学科の吉元信行教授も、Early Buddhism(初期仏教)のパネルで"The Manuscript of the Surūpa-jātaka kept in the Otani University Library"(「大谷大学所蔵Surūpa-jātakaの写本」)と題して、大谷大学図書館が所蔵している貴重な貝葉写本の一つであるSurūpa-jātakaについて詳しく紹介されたことを付け加えておく。

今回、6日間の学会期間中、次のような44のパネルやセクションが開かれた。学会の全貌を知るためには便利と思われるので、やや煩雑であるが、それらをすべて挙げておくことにする。

8月24日(午後)

Recent Works on Vinaya Studies
(律に関する最近の研究)

Conservative and Evolutionary Elements in Buddhist Tantra Literature (Part 1)
(密教における保守的要素と発展的要素[第一部])

Abhidharma(アビダルマ)

Buddhist (Hybrid) Sanskrit
(仏教[ハイブリッド]サンスクリット)

Logic and Epistemology(論理学と認識論)

East Asian Buddhism(東アジアの仏教)

8月25日(午前)

Buddhism in the West (Part 1)
(西洋における仏教[第一部])

Conservative and Evolutionary Elements in Buddhist Tantra Literature (Part 2)
(密教における保守的要素と発展的要素[第二部])

Antarābhava(中有)

Early Buddhism(初期仏教)

Mahāyānasūtras(大乗経典)

East Asian Buddhism(東アジアの仏教)

Logic and Epistemology(論理学と認識論)

(午後)

Electronic Texts, Internet and Computer Resources in Buddhist Studies (Part 1)
(仏教研究における電子テキスト、インターネット、コンピューターの資源[第一部])

Buddhist Logic: the Function of Examples (dṛṣṭānta)
(仏教論理学—dṛṣṭāntaの役割)

The Value of Nature in Buddhism
(仏教における自然の価値)

Buddhism and Brahmanism(仏教とバラモン教)

Mahāyānasūtras(大乗経典)

Buddhism in Tibet and Nepal
(チベットとネパールの仏教)

Aspects of Buddhism in South Asia
(南アジア仏教の諸相)

8月26日(午前)

Buddhism in the West (Part 2)
(西洋における仏教[第二部])

Electronic Texts, Internet and Computer Resources in Buddhist Studies (Part 2)
(仏教研究における電子テキスト、インターネット、コンピューターの資源[第二部])

New Discovery of Early Buddhist Manuscripts (1)
(新しく発見された初期仏教の写本[第一部])

Round-table: The Cult of Vairocana (Part 1)
(大日如来信仰[第一部])

Mādhyamika and Yogācāra（中観と唯識）
What is Sūtra? Reflections on the Material Culture of Buddhist Sūtras in China and Japan
（経典とはなにか—中国・日本における仏典の物質的文化について）
Buddhism in Tibet and Nepal
（チベットとネパールの仏教）
Pāli and Theravāda Tradition
（パーリと上座部仏教の伝統）
Philosophy（哲学）
8月27日（午前）
Early Mahāyāna and Mahāyānasūtras（Part 1）
（初期大乗と大乗経典［第一部］）
Round-table: The Cult of Vairocana（Part 2）
（大日如来信仰［第二部］）
Buddhism and Society in South and Southeast Asia
（南アジアと東南アジアにおける仏教と社会）
Buddhist Psychology（仏教心理学）
Japanese Buddhism since the Seventeenth Century: The Quest for Sectarian Identity
（十七世紀からの日本仏教—宗派的アイデンティティーの探究）
Philosophy（哲学）
Vinaya（律）
（午後）
Early Mahāyāna and Mahāyānasūtras（Part 2）
（初期大乗と大乗経典［第二部］）
Buddhism and Pure Land（仏教と浄土）
Tathāgatagarbha（如来蔵）
Is There a Real Distinction between Svātantrika and Prāsaṅgika Mādhyamika?
（スヴァータントリカ中観派とプラーサンギカ中観派のあいだには本当に区別があるのか）
Contemporary Buddhism（現代の仏教）
Pāli and Theravāda Tradition
（パーリと上座部仏教の伝統）
8月28日（午前）
New Discovery of Early Buddhist Mansucripts（Part 2）（新しく発見された初期仏教の写本［第二部］）
Buddhist-Daoist Interaction in Traditional China
（前近代の中国における仏教と道教の相互の影響）

この一覧でも理解できるように、この学会では、パーリ・上座部仏教、律蔵、アビダルマ、大乗経典、密教、チベット仏教、仏教論理学など、極めてオーソドックスなテーマを取り上げたパネルが目立ったが、中には環境問題を仏教の視点から究明したThe Value of Nature in Buddhism（仏教における自然の価値）や仏教研究におけるコンピューターやインターネットの利用を取り上げたElectronic Texts, Internet and Computer Resources in Buddhist Studies（仏教研究における電子テキスト、インターネット、コンピューターの資源）など、従来はあまり注目されなかったが、今後の仏教研究でますます重要になるであろうテーマを取り上げたものがいくつかあった。様々な発表の中には興味深いものが多くあったが、その中でも、特にBuddhism and Pure Land（仏教と浄土）のパネルにおける米ミシガン大学のルイス・O・ゴメズ（Luis O. Gómez）教授の発表からは多大な刺激を受けた。ゴメズ教授は、徳川時代に活躍した大谷派の香月院深励に注目し、その阿弥陀経の注釈を中心に、彼の教学の特徴を考察された。そして結論として、(1)深励の教学は近代的であること（つまり、問題意識や研究方法が現代の私たちに非常に良く似ていること）と、(2)深励の活躍した江戸時代は一般に仏教の衰退期とされているが、深励の学問からも分かるように、この時代はクリエーチブで仏教研究史の上で重要な意味を持つこと、などの点を挙げて、発表を終えられた。

なお、この学会についての詳しい報告は『仏教学セミナー』70号に掲載予定なので、それを参照して頂ければ幸いである。

国際真宗学会第９回大会参加報告

一楽　真

【はじめに】

1999年８月23日から25日の３日間にわたり、ハワイのホノルルにあるBuddhist Study Center（BSC）において、国際真宗学会第９回大会が開催された。本学会では２年に一度の割合で大会がもたれており、1993年に第６回大会が本学を会場に行われたのも記憶に新しいところである。

今回会場となったBSCは、ハワイ大学に隣接して建てられており、有名なワイキキ・ビーチからでもバスで30分ぐらいのところにある。設立母体は浄土真宗本願寺派で、本願寺派におけるハワイ開教の拠点となっている。

本学からは、国際仏教研究班のチーフ安冨教授を始め、研究所主事の加来助教授、樋口助教授、木越専任講師、池田真講師、そして特別研修員の武田、平原、田村、山田の４氏、および一楽の10名が参加した。会場の関係もあり全参加者が50名ほどだったことを考えると、大谷大学が大挙してやってきたという印象を与えたように思われる。

参加者は大学の研究者だけではなく、布教の現場に立っている人や、フリーのライターなど様々で、親鸞の教えや思想に対して極めて真摯な関わりが感じられた。真宗大谷派のハワイ開教区からも西脇・林の両開教使および事務局の高志氏が参加された。また、会場の運営や昼食のお世話などは、開教区の中で聞法してこられたメンバーが支えておられ、非常にゆったりとした気分の中で全体が進行していくという雰囲気が醸し出されていた。

【研究発表】

今回はテーマとして“Dharmakara's Vow: Engaged Buddhism”が掲げられた。適当な訳はつけにくいが「法蔵の誓願―社会寄与する仏教」といったところであろうか。

とにかくアメリカにおいては社会の中で具体的に発言したり、明確な行動を取ることを仏教も迫られるという現状があり、その中から社会参加、社会寄与ということが避けて通ることのできない課題として挙げられている。今回のテーマもそのような状況の中から出てきたものである。

発表は１会場のみ、いわゆる１部会形式で、すべての発表を全員が聞くことができるようになっており、それがまた後の議論にもつながっていくことになっていた。以下、日程にしたがって列挙しておく。

August 23, 1999 Monday

Keynote Speech Dr. Kenneth Tanaka

Panel Presentation “Vision in the Pure Land Tradition”

- Richard Payne: Seeing Sukhavati-Yogacara and the Origins of Pure Land Visualization
- Eisho Nasu: Awakening in Dream- The Pure Land Buddhist Practice of Dream Samadhi in Medieval Japan
- Lisa Grumbach: Postcards of the Pure Land- Ema Representations and Popular Religiosity

Paper Presentation

- Shoei Ichimura: Kuan-yin Boddhisattva and Amitabha Buddha
- Myoshu Agnes Jedrzejewska: Practical Aspects of Amida Buddha Eternity in Our Nembutsu Lives

<Lunch>

Forum on the Shin Liturgy

- Roger Corless: Chanting Dharmakara's Vows- A Forum on the Shin Liturgy in English

Panel Members: Shoji Matsumoto and Reynold Fujikawa

Paper Presentation

- Shoyo Masako Taniguchi: Jodo Shinshu and Ethics
- Keishun Asakura: A Comparison of the Ideas of Self-Sacrifice Dharmakara's Vow and the Idea of Jesus (Christ)
- Masuo Kuchiba and Kazuo Funahashi: The Socio-Religious Consciousness of Shin Buddhism in Japan An Analysis of the Seventh Census Date (1996) of Honpa Hongwanji Denomination

August 24, 1999 Tuesday

Panel Presentation “Shin Buddhism and Natural Science”

・Richard Payne: Pervasion and Natural Kinds: Epistemological Concepts in Buddhist Logic and the Philosophy of Science
・Kenneth K. Tanaka: A Scientific Explanation of Pure Land Cosmology-Engaging the Science Towards Formulation of "Engaged Living" (Seikatsu-Ron)
・Ruth Tabrah: Conslience− A Shin Buddhist View of 21st Century Science
・Geoffrey Redmond: Buddhism, Science and the Pure Land

Paper Presentation
・Doreen Hamilton: The Toronto Island Dojo
・Hiromichi Mukaibo: The Buddhist Pension House in Nepal
・Virginia Parkum & Tony Stultz: Engaged Pure Land Buddhism in American Criminal System: Fundamental Case
・Yasushi Kigoshi: Post-Modernism and Shinshu
・Michio Tokunaga: The Bifurcation of the Mahayana Concept of "Two-truths"

<Lunch>

Paper Presentation
・Shoshin Higuchi: Phenomenon is Reality - A Thesis by an Engaged Buddhist, Inoue Enryo
・Joanne Mied: Shinran's Indication of Lineage and Its Radical Impact on Jodo Shinshu
・Angela Andrade: Interdependence and the Unbound Path
・Hidenori Kiyomoto: Sattva in Shin Buddhism
・Esho Sasaki: A Thought on "Independence of the Name"
・Takeshi Kaku: The Meaning of The Teaching in Shin Buddhism - Beyond Ideology

<Banquet>at Treetops Paradaise Park Restaurant

August 25, 1999 Wednesday

Paper Presentation
・Eiken Kobai: Shinran and Rennyo
・Akimune Hirahara: An Analysis of the "Comment on the True Disciple of Buddha" in the Chapter on Shinjin of the Kyogyoshinsho
・Makoto Ikeda: The Awakening through Aspiring for Birth in the Pure Land
・Makoto Ichiraku: The Buddhist Way of Aspiration for Birth in the Pure Land
・Nobuo Nomura: A Myth of the Pure Land
・Shinya Yasutomi: The Opening of Dharmakara Spirit - in terms of the case of Rev. Takagi Kenmyo (1864-1914) a Meiji Shin Buddhist
・Alfred Bloom: Towards a Proactive Engaged Shin Buddhism: Reconsideration of the Double Truths Teaching (Shinzoku Nitai)

【まとめ】

会の全体について総括することはとてもできないが、印象に残ったことを若干記しておきたい。

まず、参加者の多様性とも関わっているが、それぞれの問題関心に立って真宗が論じられ、日本の中ではあまり取り上げられない視点が多く提示されていたように思う。上にも述べたが、真宗が現実生活にどのように関わるかということが大きな問題となっている状況の中から、倫理について、あるいは生活論といった課題が前面に出てきている。開教という観点からしても、これまでのような日系社会の枠組みが崩れてきている中で、欧米の思想とどのように向き合っていくかが避けられない問題として出てきている。この問題は日本においても起こりつつあるというより、すでに起こっている。とすれば、今回のような意見交換の場は、今後より重要になってくると思われる。

この意味で、会の持ち方も非常に大切になってくるであろう。もともとは本願寺派の開教使の研修会として始まったと聞いているが、それが広く公開されてきている。広い交わりを通して、それぞれの大学や宗派の独自性はかえって明確になると思われる。

今回の大会は参加者が50名程の集まりであったが、それがかえってパネル及び研究発表を全体で共有することにつながっていた。活発な意見交換にも触れることができ、日本における大きな学会よりも実質をもっているようにも感じた。それは、自然に囲まれたレストランで行われた懇親会における心温まる交流にも感ずることができた。

真宗総合研究所彙報　1999.4-1999.9

■「指定研究」庶務担当者連絡会
議　題　真宗総合研究所のホームページについて
7月1日(木) 12：10～　博綜館小会議室1

■「指定研究」研究会／講演会
○「指定研究」国際仏教研究班
＊清沢満之の翻訳研究
講　師　マーク・ブラム氏（フロリダ　アトランティック大学教授）
5月21日(金) 14：00～　博綜館第4会議室
6月11日(金) 14：00～　博綜館第4会議室
6月25日(金) 14：00～　尋源館会議室
7月2日(金) 14：00～　博綜館第4会議室
＊安田理深の翻訳研究
講　師　ポール・ワット氏（アメリカ　デュポー大学教授）
6月17日(木) 16：00～　博綜館第4会議室
6月22日(火) 18：00～　博綜館第2会議室
○「指定研究」大谷大学ＦＤ研究班
＊講演「最近の米国大学教育事情とＦＤの問題」
講　師　岡田　伸夫氏（京都教育大学教授）
7月9日(金) 18：00～　尋源館会議室

■「一般研究」研究会／講演会
○「一般研究」共同研究大内班
＊講演「本世紀唐代文学研究百年顧」
講　師　蒋　　寅氏（中国社会科学院研究所研究員）
7月15日(木) 14：30～　博綜館第三研究室分室2
○「一般研究」共同研究木場班
＊共同研究会
第1回「中国東北地域東本願寺別院跡地の探訪」
講　師　鹿崎　正明氏（真宗大谷派大阪教区教化センター主事）
4月28日(水) 14：30～　博綜館第3会議室
第2回「海外神社の研究―研究の経過と現状、および中国東北地域における調査研究の見通し―」
講　師　中島　三千男氏（神奈川大学教授）
6月23日(水) 16：10～　博綜館第4会議室
第3回「日本宗教の海外布教―新宗教の事例から研究の枠組みを考える―」
講　師　藤井　健志氏（東京学芸大学教授）
7月14日(水) 16：10～　博綜館第3会議室

■学会参加
○「指定研究」近代史研究班
＊全国大学史資料協議会西日本部会
1999年度総会・第1回研究会
5月28日(金)
会　場　天理大学
参加者　宮崎　健司（研究員）
狭間　芳樹（研究補助員）
＊全国大学史資料協議会　1999年度総会・全国研究会
9月20日(月)～9月22日(水)
会　場　金沢大学
参加者　宮崎　健司（研究員）
御手洗隆明（研究補助員）
○「指定研究」国際仏教研究班
＊第3回ルードルフ・オットー　シンポジウム
5月5日(水)～5月10日(月)
会　場　ドイツ　マールブルク大学
参加者　訓覇　曄雄（学　長）
宮下　晴輝（所　長）
加来　雄之（主　事）
安冨　信哉（研究員）
箕浦　恵了（研究員）
友田　孝興（研究員）
門脇　　健（研究員）
ロバート・Ｆ・ローズ（研究員）
木越　　康（研究員）
大河内了義（嘱託研究員）
寺川　俊昭（嘱託研究員）
Ａ・Ｄ・コルニル（学内特別協力者）
児玉　　保（学外特別協力者）
高田　信良（学外特別協力者）
＊国際真宗学会第9回大会
8月23日(月)～8月25日(水)
会　場　アメリカ　ハワイ大学
参加者　加来　雄之（主　事）
安冨　信哉（研究員）
樋口　章信（研究員）
木越　　康（研究員）
一楽　　真（研究員）
＊第12回国際仏教学会
8月23日(月)～8月28日(土)
会　場　スイス　ローザンヌ大学
参加者　宮下　晴輝（所　長）
ロバート・Ｆ・ローズ（研究員）

■出張／調査派遣

○「指定研究」大谷大学近代史研究班

＊期　間　5月12日(水)～5月14日(金)
出張先　東京都公文書館、東京大学史料室
出張者　御手洗隆明（研究補助員）
要　務　真宗大学（東京巣鴨時代）の史料調査並びに資料収集

＊期　間　6月3日(木)～6月4日(金)
出張先　東京法務局豊島出張所、国立国会図書館
出張者　御手洗隆明（研究補助員）
要　務　真宗大学（東京巣鴨時代）の史料調査並びに資料収集

＊期　間　6月16日(水)～6月18日(金)
出張先　東京　真宗大学跡地等
出張者　友田　孝興（研究員）
要　務　「浩々洞百周年記念の集い」に参加並びに真宗大学跡地および求道会館の調査と資料収集

○「指定研究」国際仏教研究班

＊期　間　6月19日(土)～6月20日(日)
出張先　真宗大谷派浄恩寺、曽我量深記念館、円徳寺（曽我量深の生家）
出張者　宮下　晴輝（所　長）
　　加来　雄之（主　事）
　　小川　直人（研究補助員）
要　務　浄恩寺所蔵曽我量深自筆原稿の調査並びに曽我量深記念館、生家（円徳寺）の訪問

○「指定研究」大蔵経学術用語研究班

＊期　間　9月28日(火)
出張先　東京　駒沢大学
出張者　古田　和弘（研究員）
要　務　大蔵経学術用語研究会「理事会」出席

○「指定研究」清沢満之研究班

＊期　間　5月19日(水)
出張先　愛知県　西方寺（清沢満之自坊）
出張者　一楽　　真（研究員）
　　沙加戸　弘（研究協力者）
　　名畑直日児（研究補助員）
　　三浦　　統（研究補助員）
要　務　西方寺の資料調査

＊期　間　6月6日(日)～6月7日(月)
出張先　愛知県　西方寺（清沢満之自坊）
出張者　名畑直日児（研究補助員）
要　務　西方寺の資料調査

○「一般研究」個人研究米本班

＊期　間　6月15日(火)～6月21日(月)
出張先　アイルランド（ダブリン）
出張者　米本　義孝（研究員）
要　務　『ダブリンの人びと』研究の現地調査

■人事

＊1999年4月1日付をもって、研究所嘱託事務員が三好裕子から大橋由美子に交替した。

■客員研究員

・Paul Watt（USA・デュポー大学）
・孔繁志（中国・首都師範大学外国語学院助教授）
・蒋寅（中国・中国社会科学院文学研究所研究員）

【お詫び】

『研究所報』No. 38の配布が大幅に遅れましたことをお詫びいたします。その責はひとえに前研究所主事・加来雄之にあります。ほとんどの共同研究が研究成果をすでに『真宗総合研究所研究紀要』などに発表済みであり、今更、研究概要を掲載することもおかしいとも思いましたが、記録のために載せることにしました。また次の所報の発刊が迫っていたこともあり、編集・校正は加来が行いました。誤字脱字などの責は加来にあります。

研　究　所　報　第 38 号

2000年12月25日　発行

編集発行　大谷大学真宗総合研究所

〒602-0802　京都市上京区寺町通今出川上ル二丁目鶴山町８番地

Tel. 075-212-5500　Fax. 075-212-5501